

したのだ乗合の手前も有う時成無の酒を飲で無益へ口論を始めてヨ外國人へ對して外聞が惡
 いじやア無か而て何だか珊瑚珠が如何か爲とやら云
 事だが珊瑚珠を如何した譯マア此方へ來て落付い
 て咄しおせへト三人を二階に連ゆき委細の論を一
 く聞彼珊瑚樹をお前方の寶物だと思ふのかト謂れ
 て三人ギョットせしが金主の兩人の尙驚ろき彌若
 く親方、夫やアは、寶物じやアござ
 りやせんかナ廣ハ、實物所ろかはやア丸太島
 で他國の人と見ると箱込に掛る珊瑚珠の偽物マ北
 ヤア、どふせう、りやアた、大變だ彌次さん
 、、とふせう、彌ナント親方此船を少時丸
 太島の近所へ付貰う理屈もやア成升めへが北エモ
 シ親方何卒お前さんの御威光でチ廣何を白痴た事
 を云のだナ丸太島から百里も來て船を戻せとの氣で
 も狂ふたのか馬鹿くしいと謂れて兩人頭掻キ差俯
 伏て顔色青色默然で大に懨懨三十ドルの大金を失ひたる氣がして果のホロ、涙ぐむと通



涙ぐむと通

次郎の懐中が痛まぬ事故小氣味能氣も高みで二個を見下し乍らせ、ら笑ひて「モシ親方僕が珊
 瑚珠杯ぞの鑑定一向お者でゲスが彌次さんと北さんが何でも買て呉ると達て頼むのでゲスか
 ら據ころなく價の押引の爲した偽物を箱込どの不届を譯でゲスチ廣「イヤ太へ比へをするも
 買奴よりか買ふ方が不届サ何程珊瑚珠が澤山ある土地だと謂たつて二十兩からする珠を三分か
 一兩で買氣たから外國人又箱込せられるのだナ而てユルマ島杯ぞよ在珊瑚珠の正物だと謂て
 も英吉利の商官が前びろから敷金をして上物の他國の者の手は渡さず引舉て仕舞た撰竟した
 から碌々珠の有やア仕無併し下品のても寶物なら些この直打の有ければ是やア珊瑚珠も似た且
 を琢磨して潤色を爲乃だから日本乃明石玉より直打の無ハテ而して三十ドル出したと云が何處
 を目的に買込込んだのだホンニ困つた客人だぜ其様事じやア是から英吉利の本國から亞米利加
 の國へ渡つて外國人と交際つて賣買をしたら柄億万兩有ても足ねへ程損の限り知ねへぜ
 ム、ユウ彌次さん北公も三十ドルで商法の積古をしたと斷念るが宜真も斷しよも成ねへ始末だ
 ト三十ドル捨た上よて散々油を取れ始めて夢の覺たる如く去年ら欺騙れたる己れ達が愚の更
 ん思はずして全く通次郎の取引と掛合が悪き故の事あるべしと心の裡は通次郎を深く恨みて愈
 痴たらしく彌ナ如何も今と成ちやア仕方がムへせんが私等ア全体マルマ島は珊瑚珠が有か
 無か其様事の夢中で居たを通さんが知つた風で講釋をした者だからツイ上陸て見る氣も成たの
 でムへやす北然々、生兵法大統の元だ少と許り西洋の事を聞かちつて在と西洋から勇て出

た様を法螺を吹もんだ柄人迄こんを目よ合せるのだ此損の半分通さんよ償つて貰い無りやア成
 やせん通「何だと二十分も無申戯も然な熱が能吹れるね壁へ僕が嘶しを仕様どもも前方が氣
 の無珊瑚珠を無理に買ひませへと勸でも爲ア仕舞し一体お前方がお先眞闇を癖に怒張て在から
 損を爲のだ彌「お先眞闇でも怒張ても大きよお世話よ北「お前の厄介なやア成ねへヨ通「誰か
 然亦厄介を引受る間拔が有者か彌「間拔たア誰が事た通「イヤサ然亦厄介を引受る人の事を云
 のだよ分らねへ半間々北「ナニ此頓痴氣め通「何だと汝ト又もや互ひよ氣色をかへ詰寄を廣藏
 制して廣「是サ又か如何した者だ通さんお前も似合ねへ相手よする氣なら向ふの孤島よでも
 上陸して死よ會とも喰合ども勝手よ爲せへ彌次さん北公己の云た意見が分ら無で未彼是と云さら
 モウト「お前方よやア度々「怒て在から手切レ金だと思つて已が三十ドル遣から此先の「ツツ
 ナルタル」といふ港へ上陸んさせへ共處から日本へ便船を頼んで歸して仕舞から然極るが宜馬
 鹿ッ面赤人達だト以ての外立服の様子よ兩人一ト縮み恐れ入つて體「「「「流石通次郎も
 口論を爲もの、元よりのコンペイ故よ氣の毒よ成身も詫兩人の詫事も成じりよ威威の納まり
 が付ぬ故故意と立服の景色を見せたる件あれば早速聽入兩人が損毛の半金を償ひ呉し故彌次郎
 北八の悦びの中の悦びよて諸事抜目赤き廣藏が計らひよ威威し厚く禮を述通次郎との中も直り
 て其坐を退ぞき各々居間よ來りて
 はめられて珊瑚珠ほど血の涙しほりもあへぬ身のみぶらかな

さきの目の黒ん坊赤れ白うと、見込てはめた朱玉青い黄
 通「アハ、ハ、ハ、十五ドル損を爲よ仕ちやア秀逸「「何ト私等の肝の一寸の潰しやすが直
 よ脹れる柄ゴムの笛や蹴鞠杯ぞより速かサチ北「喘ても脹れ榮のしねへ十五ドルの親方が埋て
 呉たが跡の十五ドルの印帳沼だ通「イエサ夫やア必云べからず損の徳の基は是から捕覽會とい
 ふ大詰の有し二番目の亞米利加の大舞臺でカリホルニヤの山を堀つて金銀若干を得る策が有や
 せう何んの十五ドルや二十弗風塵の様者でゲス彌「ふうぢんよ釣鐘で又片ちんべの辻占かチ
 北「片足の犬で氣許り強、ンても納まらねへ彌「併し是よ徳ヨで此後の迂架り物の買ふ舞ぜ此
 方とらの様赤奴だらう夜見世反物を買つて家へ歸つて安直自慢をして翌朝丈をさして見ると八
 尺足り無ツたり古本と安く買つて讀んで見ると落丁だらけサ北「安物買の錢失ひの昔ツから有
 やつたか二と三の最中や氷浸しへ引掛るのが今でも遇よやア有りうだ通「マが我國も此三四年
 以來日々開化が進むので猿の肝を熊の膽だと言つて田舎同者を欺騙たり道連よ成て宿合をし
 て拳や基將某で金を貪ぼる淺はかな巧をする悪者が無かつた柄實よ有難イ譯サ併し油断大敵身
 の用心よ若いあしサチ通「何サ商法が盛んよ成やアコセ「盗賊何ぞをする奴の無なる理屈マ
 通「其處が開化とも開知とも云のでゲス北「已ツちも開知とか開化とかの道を聞て戸迷をして
 珊瑚珠の偽物何ぞと有負込ねへ様よ實際の商法を心がけやう彌「手前や已ア欲い人並だか少

早々か敷欲だから引出し違へや戸迷ひ爲のダ是から落付いて欲張らうぞ北欲は發明と馬鹿が有やす已ツちの馬鹿だから散財するのヲ彌サット立關がすんだら欲馬鹿は御散財といふ洒落か北誠は洒落どう候いけるボンく通アハハハハハ此奴の宜ト贊言は先刻の不快も忘れ共は笑ひを催しける中船の次第は地中海を西へくと進み行其入口あるツアラタルの瀬戸を目的て乗入りテ、若を示す祝砲は土人の眠りを覺しけり〇マドンドロくく

第十二編

抜も彌次郎北八通次郎の同社の丸太島まで珊瑚珠乃價物を買ひ込みし件を廣藏は説得されて初めて悟り此上の物馴れざる件を容易に手出しのすま敷物と船中面目をげよ平生の人より先は何事も罷り出て口功者よ言あせ其重ねのの不調法況て今度の失錯よ若干の金も費せし件おれは兎角逡巡のみして居たりけり丸太島を出帆せしより日和も能波風も穏かなれば船の蒸氣の勢ひも因て矢を射る如く瞬息間も數百里を過て忽ちツアラタルノ瀬戸よ若しぬ此地の地中海の入口よて當時英吉利の領分なり臺場の堅固なるの世界中第一番とも云べき構ひよして海岸の岩山を切りて砲門を開き大砲千挺余も据付あり南岸の亞非利加の地方よて北岸は即ち右の臺場なり兩方の間には甚狹き處よて六七里許り是より外の大西洋海と号す英吉利人の地中海よて威光を輝かすの此臺場とツアラ島の臺場と二所よて要害の地を堅めたるよ由ての事よて諸國の人々はを恐れ憚からざる者無といふ此地の地中海の碇泊所なれば先船を海岸よ繋ぎ乗合の人々の皆

上陸して所々を見物する中彌次郎北八通次郎の三人の丸太島の事件は憶へて互に頷を合せ沈黙として居たりしが通次郎の兩人は向ひ通コウ南君聞給へ此度の一條の實は譯がらを聞て見りやア珊瑚珠杯ぞと云物の素人が無法に手を出せる事じやア無併し色合と云何と云一点環環も無まさか異人が彼操偽造を爲ア仕舞と思つて買込んだか面目も無次第で損愧と云のの此事だらう彌次郎夫よ違へ無我等達だつても東京の真中で生れて幼少といふ時から千人の股を潜りて萬人の尻子玉を抜て芝居町じやア河童が養れる吉原じやア立番が横よ手招きさ四谷赤坂麹町本所深川芝高輪四里四方の策下を轉がつても往來の通り損をひり無といふ我輩が仕損を爲のの所謂よ上手の手から水が漏たんだア北彌次君お前よりやア掩非だぞ拙子考へて見るのよ四千八組の火消が綱を擔ぎ出して町奉行が馬上を馳出す時の様な了簡で爲と威を失錯せ彌貴公大分高慢の事を云出したせあせ昔の了簡で爲やア成ねへてんだ北ナニ自己が思ひ付て云んじやアねへ此度西洋へ乗り出すと聞て足下も知ッて居る千住の馬島玄真さんと吉原の沼口操さんと京町よ出張てゐる寫眞の先生本郷さんと三人が奥山で電信機の究理を觀物よ出掛た歸りだと言て今度賣出した柳橋向ふの柳光亭から呼よ寄したから何でも彼衆が來いと言ふ柄よやア損の有めへと思つて財布の口を廣げて行て見ると諸君澤山酒を呑ねへ人達だ者だから尋常よ構へ込で居て自己よ謂よやア吾子よ近頃大連で洋行をするといふ事を聞たが斯ういふ便利を世界よ成た上よやア案じる件いねへ様を筋だが遠い海を乗り出すよ付ちやア我輩も平常勝負よ思つて居る

から一寸會て何やかや西洋の様子を聞たとも有から咄して一杯酌み別れを仕様と思たつ柄呼よ
 遣ったんだマア如何云子細で洋行をする氣も成たんだと仰しやるから別乃譯でも御坐せん横濱
 の親方大腹屋の旦那が英吉利の博覽會とかを見よ行と仰しやるから贅物も附屬て行うと思ひ升
 と言たら三人か例の西洋好だから手を打て夫アホア何しても大業だ我等も斯いふ世界も成ちや
 ア是非一過の航海心組だが手元の件も因循して未左様いふ段も行ねへが早速出發る機會も成
 との誤しい運の誰くたど聞から此仲間や名を云たら夫アい、通公杯ぞといふ開化た人物も混
 つて居て如才も有めへが先旅へ出る心得と云もの飛脚が三里の灸とすへて足を健剛よ爲から
 家業を初めると同じ事でも豫又地理の景況や人氣の善惡迄少たア知つた上で無ツちやア兒戲ない
 失錯をする事が有者だと言れたが其時の何の人を思ふする何國の果へ行たつても氣轉と知惠と
 いふ調法亦有者が有柄よやア如何轉んでも臨機應變様の幾位も有と腹の中じやア冷笑可笑く思つ
 たが鄭重した錢を貰つたり又平常借金も成た柄と云ても印紙を一葉貼といふ譯じやアあし万事
 厄介なる且那衆だから不得止よ唯々くど承知て措たが今考へて見ると眞坂大人の云事も咄
 悟の無と思ひ出した柄ツイ云ひ出したんだが如何でも一端の心掛無ツちやア成めへかノウ通さ
 ん通、夫アお前毎度自己が其事を云つちやア足下等も物數奇だの茶人だのと云れるんだ一同其
 所へ眼が付て來やア幸ひひだ長い船中退屈じやア有し隣の部屋も居上總生れの人だとか云方
 が大分博識然いよ是迄少時くど我輩が部屋へも來さした事も有から是から三人で押込で事

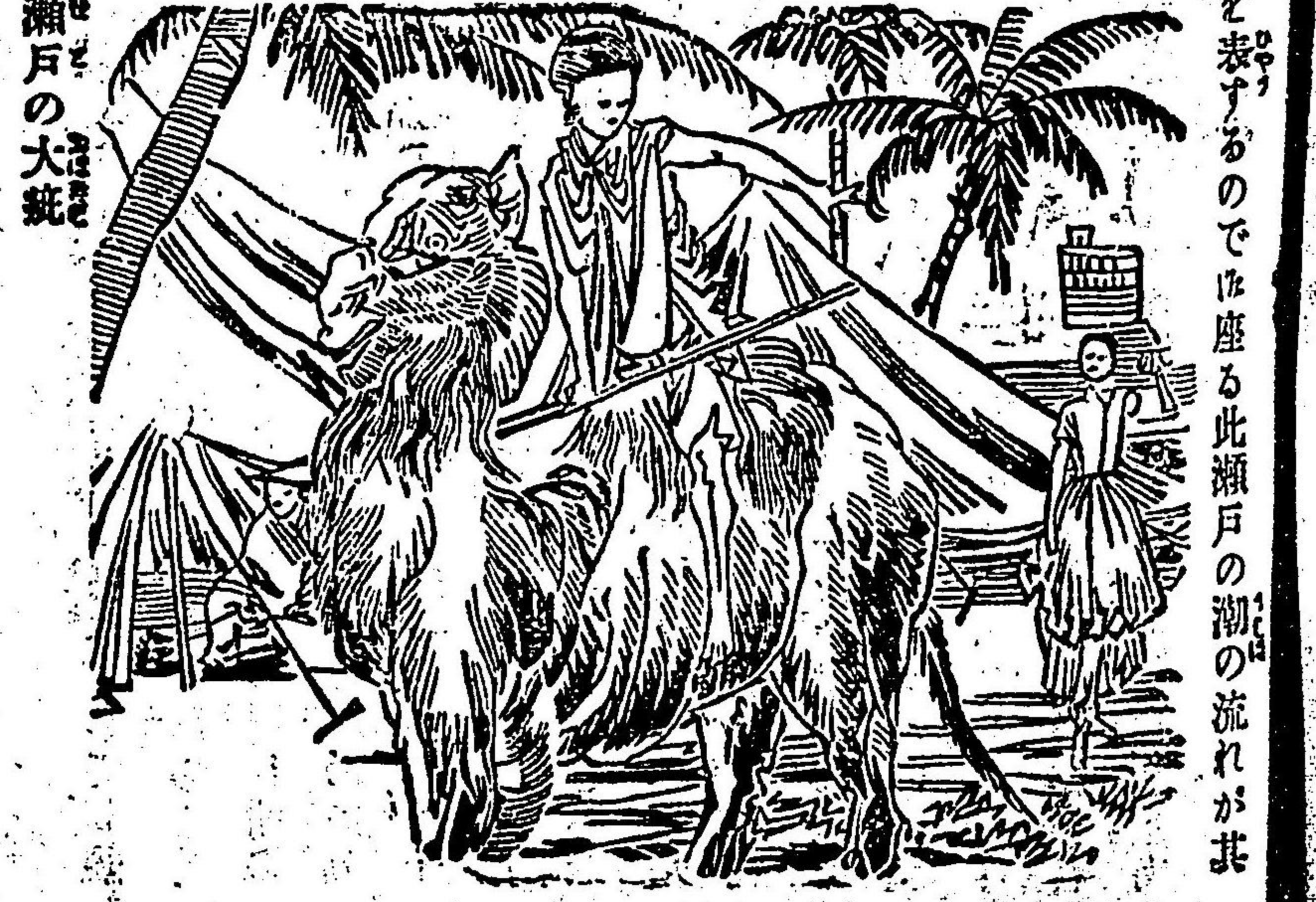
情を聞と仕様じやアねへかト三人相談極り西洋酒牛肉其他種々の肴を携へ隣の部屋ある上總
 の生れと云し人の所へ至る元來此人の少し許りの漢學杯して器識譯本を讀知り未だ原書よハ渡
 らねど才氣ある故よ一個の先生然云ひ廻せども矢張り是も半物知よて姓名の外よ号を鯉齋と稱
 ひ總髮天窓よ被布等着し俳諧師やら醫者やら卜筮者やら確とした見込も付ぬ異變な氣取たる風
 俗よて乗合の人も相手よ爲人もなく退物も成て折くの手よをの合ぬ哥を詠平灰の調のぬ詩
 を作り採して自得顔なる人の好ぬ素態よて其謂處も半分の間違にて附會講釋と知るべし三人一
 へい涉免下さいまし先生是のく各様お揃ひで直隣房よ在乍ら參商の隔りを成まして涉座
 る杯と一寸謂件よも識者然其内三人の夫々座よ着ばフランクの上よナイアルを置酒を始め
 一度二度咄す内よ最早小六テ敷事を謂出すの平生の辭あるを別して今日の云せん目算あれば三
 人よて先生でかよ煽動散す故圖よ乘て並べ立る故通次郎の鯉齋よ向ひ通時先生私も物數
 奇で横文の原書の少し許り讀ますが元來漢學の力らが涉座せんから支那の歴史を讀とが二の手
 よ成やす歐羅巴諸州の事も反つて翻譯で見人よやア及びやせん先實よ通次郎さん漢學が
 來て居ば西洋各國の大體が早く理會ます彌次郎さん北八さんも開化の仕方じやよ因て一通り天
 地開闢以來今日よ至る迄世界萬國の沿革をお咄し申升るが政治の事や器械の製造よ至り當今の
 如く盡く文明も成たの中や一朝一夕の事では坐りません其始めよア物を表て喰ふ事ハ知
 らず着物を織る件ハ知らず家を造る事ハ知らず猛獸と格闘て獸獵を生業よして雨露を凌ぐよや

ア張幕を引張て此所といふ借極りの無彼處此處住替て貨幣といふ物もあく禽獸と一處野山
 住替て農業をする件も知ら無つた時を未開の民と号け又洋語でセハルマヤンと北「夫」
 やア親子も夫婦も無んですか先生「何と凡天地の間生ずる物も親無といふ事なし又親有
 子無と云ふ譯のなし只親もやア親の道子もやア子の道といふ差別が極ら無つたのさ今でも亞
 比亞、西比利亞、羅祖の様な所のケ様を風儀が残りて居りやす皇國の中でも「ア三箇の津の様な
 所ろの澤山のをい片部な場所へ行やア人間界じやア有まへと思ふ所が有のさ彌「先生の上總の
 生れたと聞やしたたが彼邊も娼妓等といふ品が有やすかね先「有共く夫の牛といふて旅
 籠屋もやア二三入づ、給金を以て抱ひ措又下總の銚子邊でり提げ重といふ船橋の宿でり入兵衛
 と云實も盛ん者で座座る彌「夫やア面白の娼妓の名でん牛と云の如何いふ譯で御座へせう
 先「夫は社典故あり牛の野獸の長よして力量限りなく何物を乗掛ても畏れ無といふ理も因て云
 爾のみ彌「提げ重といふ是亦謂れが有やすかね先「有共く先「旅宿屋等も泊り客の所へ重箱を提
 げて喰物を賣る行座敷へ還入込で終は添臥をする所から唱ひ始めるので座座る彌「成程聞て見
 りやア面白ふげすね又入兵衛と云のも子細が有やすかね先「凡世間も唱ふると無稽といふ御
 座りません皆其本の正しき大和詞なりしを種く訛り杯して終は無稽との様は聞ゆれども夫
 の面々の不學から解せぬので博く古言も通ずれば難曉と申すとのムリやせん其入兵衛と稱する
 も左の如く先下總邊りでの何事も仕様と云を仕可と云因て女子が客も向つて満事を仕様と進む

るを四兵衛く〜と云よりて此詞を合併して入兵衛とやすなど、口から出任せ道辞牽強附會
 れば流石の三人も可笑く思へとも互ひに付き合て又問ける様彌「成程一寸と聞ちやア可笑様で
 ぼす併し吉原で娼妓京都で天神太坂で太夫杯と云のも譯が有やすかね先「大有く抑く吉
 原で唱ふる娼妓と唱の多の美婦人が見世を張て在のを男が任職して其夜の闇房も伴ふとい
 ふ義を取て雄の方より撰ぶ故に雄撰と云天神とい唐詩選も美人天上より落つ龍塞初めて春
 るべしと云如く其娼妓たる件人間とい思のれす天降りたる乙女の様じやと云件で太夫と申すの
 今と違ふて古への白拍子杯といひ歌舞を以て娼と求むる者みな高位貴人のもて遊び成故も位を
 付て五位の諸太夫も准するのだ清元常盤津義太夫などの諸藝人を太夫と申す様を筋でふる通
 成程先生の博識よの恐れ入りました先「先世界の事の下情も達するを第一の心掛と思はれます
 通「其處で一首出来ました
 文明も野暮も同じ戀の道迷ふ一字も翻譯のなし
 先「扱西洋の物語りも傳徑へ紛れましたが彼未開の民たる者も漸々農業等を爲事を受へて村
 落をなし其中よの品物と製作し商業を營む者も出来て自から首長の法令と立て約束に従がへど
 も残忍の風俗よして他の部落を劫し資財人畜を掠め取り致して有しが其後農工商の業ともよ
 行のれ藝道や文字を講習し他國と交易を始め品物を製し土産と出し禮義を重んずる風も成ども
 我非を飾り人の是を取す今の支那、比耳西亞、土耳其等の様も成たるを半開の民と洋語もハース

シフイライズドと唱へ夫から農商百工の業盛よして學問諸藝を研き人情は虚飾少なくして法令を明白よし刑罰寛大を責ふの當今の文明開化よして洋語はインライチンドと申す彌して見りやア西洋だと謂ても皆伶俐で始めつから頑愚事の無といふ譯でも御坐やせん子北「夫よしても今度の様な損愧を禁と云件に商の道も知らぬいで爪の長柄だのう通さん通然バ先生是から我輩も龍動へ行きやア只見物許りして歸るが能でも有やせんから相應の商法よ成相な物が有たら堀出うと思つて居るんですが西洋人の商法をする目的を早く悟り様の御座へやせんか子先「夫よ社を話しあり此ヲアラマルの瀬戸の南岸は亞非利加洲北岸の壘場よて御覽の通り間狭き處よして僅六七里許り此瀬戸の不思議あるとの潮の流れでる地中海の此瀬戸許り一方口で袋の如くある瀬戸の外から始終流れ込んで内から外へ流れ出すと云との御座りません然れども古來より地中海の水の溢れしと云事なく西洋人の説よの斯毎日毎夜流れ込む水は地中海の暖氣よて湯氣の如くよ成て空中よ消失せるか又の地の底よも道ありて人の目よ留ら無處から外の方へ流れ出たらうと申すすが實よ不思議事では是が則ち西洋人商法の奥義を悟る所でる北「へい此瀬戸の様子で商の筋を悟るとのマアどう云事でげせう先「夫商法と申す物の此瀬戸の潮の如く何の品といふ嫌ひなく利益と見えバ澤山買込んで自分の手よ入れ現在見かけた物の人よ渡すといふ事のをし又金銀の取引も入り高許りよして出金の無様よ致を利徳已よまて損失の無のを肝要と致しするよ因て日々入用の金銀出入帳と書しよも世といふ字を少く

認め入と云字を大筆よ致すのも即ち利益福徳の形兆を表するので座る此瀬戸の潮の流れが其通り入許りよして出ると云事がなく實よ商法の奥旨あるを西洋人が理會致したでる杯と少しの理ある様なれども皆ごまかしの牽強附會なれば彌次郎堪兼て此方も少とあひやらかして遣んと思ひ彌「成程此口の潮の様よ入る許りで出がなけりやアマア上策理屈ですが地の底を潜つて人の眼よ付ねへで又外の海へ潮が出る様よ世間の知ねへ損を爲やア何よも成やアしやすめへと謂れければ先生理屈よ詰りて當惑の体なりしが例の負おしむ故又何とか彼とかを云出しううを顔をして居ゆる彌「今日のマア種く御話しの相伴をして西洋の事情が依つばと明く成やして所で一首口吟やす



欲ばつて矢觸吸ひこむ瀬戸の水人の知らぬ底ぬけの穴ひいわれの有もいやがる入と物の底がもるとい瀬戸の大坑

果の笑ひも打粉れ已が部屋よど飯りける
 世の中何常なる飛鳥川昨日の淵の今日と遷り變るが當今の文明開化の基本として新起
 發明日新の上の王侯將相より下農商の卑賤人裏店住居の口雇取鏡打坊主に至る迄みな新らしく
 面白き工夫の先かど心頭懸け窮理する氣の何事も細く長く電信線撓まらず屈らぬ鉄の橋目附の
 橋の石よりも堅く持ねば成就す些いと思かけて些いと惚些いと仕掛て些いと飽輕躁浮海の所爲
 されハ窮理穿鑿其本を推究る世界の大禁物山を崩して鐵道の海を填めて蒸氣車を一時の間よ十
 里の道早い便利の手間をかけ隙を潰して元をいれ馬鹿ハ敷と些いと見の鼻もと思案よ訝りし
 も人間業との思入れず神妙不測と感服す然ば世界の萬國を巡る人をば九俗の目よ已が國さへ敷
 多く五畿七道よ利が付て北海道で八道の六十六部も子を産み出し八十余州の長旅ハ伊勢へ七度
 高野へ三度朝比奈三郎島巡り鎮西八郎桃太郎鬼界が島の俊寛で佐渡ハ四十五里波の上三宅八丈
 大島を可厭かへるよ西洋の太平洋のあたり海江海裏海印度海浮れ同社の板子一枚地獄の沙汰も
 金が入り一番客が七百ドル二番の客が五百ドル龍動巴動コウヨルク下等で二百ドルの部屋
 の廣さが四疊半寢床の棚を三段よ三人相籠屋食事よ一箇アイナル取巻て十八二十客合の椅子
 よ罹りて食ふ飯の三度よ事ハ欠ねどもハ肉類汚穢く船よ揺れて嘔吐を吐航海すれば後悔の種
 と知ぬか惘然と嘲り誇りの面隨の狹狹者の口實あり彌次郎北八通次郎の三人ハ毎度退屈の余り
 無稽い物語り爲ぬる中よ北コウ彌次郎さん大分憎くノ文ハこぐと居雁りて身を濡する体を

いふをなり彌「あせ出し抜は突くんぞ仰天すラア北」お前マア如何したんだ只今喋々て在と
 思ふと鼻から提灯を出して口から涎を垂かえて將死た鬼を見た様よ氣樂を男じやア無か彌「然
 か其様よ睡たのか昨夜貴公遠は彼を輩らを（あんぢ奴等との乗合のうちにて懸念な人と見へた
 り）引張込で何箇を初めて愚騷々しいと思つて居内よ漸く仕舞よ成てマア宜と少し寐様と爲
 と只せハ窮屈を所で北公が大人げねハ商吉を相手よ腕相撲をしたたり雁推をしたたりサ又お茶味子
 とお酌が白眼よで可笑かア成し二時よ成のよ少とも寐やア爲無だから今日の何となく悄然した
 様で成ねハ北「宜加減を託云をするぞ寐ねへのハ已らもち前も同じ事た何で寐た時が二時よ成
 者か未十時前だらう彌「馬鹿を云ねハ其爲の時辰計じやアねハか北「貴様の時辰計が當よ成者
 か日外か横濱で壹兩二分て出して狂つた時計を買込で直し遣つても職人が役よ立無つて見
 放した者を色くくよいぢり散かして見ても始終二時三時位づ、違つて間が悪ハと半日位狂つて
 居じやアねハか彌「悪云あさんを仮令直段が高いからつて好といふ譯ハ無又安いからと謂て性
 度下等と云寄ハねハ目の利た者ハ奇貨と云奴が在アいつか手前が柳原の掛見世で買た羽織を見
 た様よ三分三朱で名撰紬の糊粘物を負ひ込んだのも知無でゆき丈が丁度好の縮柄も當世風だの
 と自慢して兩國の橋よ上まで來ると風よ吹れた處が糊が剝れてだらだら成て皆飛で仕舞て袖
 許り手の先よ引懸つて振くくして居たじやア無か北「彼時ア酔て居申顔面よ直を附たら負
 られたんで體でねハ件ハ承知して居たが彼様奴よ貨幣が無と思われちやア外聞が悪いから引取

たんだか若物おんざア能持たツも持た限の事よ時辰計の其刻限は因て大きな損徳のある件で肝
心じやア無かまア論より證據通さんのと合して見させへと出して見ると短針も長針も居所が滅
ちや苦茶よて一向取極りなし北「夫見ませへ此様物を當よする位なら腹の空たのを十二時と定
て置方が余程たしかだ處で一首できた

一日よ一時くるへば一年よ三百六十五時のたがひせ

彌「夫あら已も一寸浮んだ

古手屋の虚言ふく風よ乘られて別れ〜とありし糊合ひ

通次郎も又筆を執て

滅命かと見へし鎖の真鍮の孔子も時計よありぬあるべし

彌「相更らす通さん狂哥の故事來歴が交つて在から一寸開ちやア解し惜い所が在どうでス今
日の何時の様は失錯を拵へねへ遊びを催ふ相じやア無か子「通」夫やア宜ろふが長い旅て種〜
藝道も盡した柄碌も遊び事の有やアしねへせ北「何とか意氣を日暮しの工夫の無かのと云處へ
供七も同じく無爲よ退屈と見へてぶら〜來て顔を出し「供」若若い達何の浮馳走でも有ます
か子「此前の供七が言葉の田舎風ありしが久しく都人ど一所よ在ゆへ余程當時のきれいは成し
あるべし」彌「爺好處へ來て呉た最〜船の中で居たり立たり許りして退屈も考だから頭の外
れる程口を明て互ひよ欠伸許りして居るんだか通よ浮れ出すと不關法仕出し最此願戸を廻り

て外へ出りやア大西洋海とやらで一日よも英吉利の地へ着れるんだサアスアンフトンへ到着す
りやア又種々な面白事も有だらりから夫迄の處の〜ア大人しく歸國してから日記の中を開けて
も少いと品の宜趣向で暮さうと云んだから何ぞ思ひ付な徒の無かのう體の甲より年の功だ考げ
へて呉ねへる「供」夫なら如何だらり皆意氣な色男衆だから後句俳諧といふのも古風し狂歌の毎
度詠成つて澤山あるし少と新しい文句で端唄の作り替をして考への遅い者の罰金と極ちやア
如何だらり通「夫やア面白い罰金も少と不風流だから運動（運動とい西洋よて氣血廻りを能す
るためよ身を動かすことあり）の爲よ少いと何でも宜として可笑立廻りを爲様じやアねへか
彌次さん彌「白〜併し北さんの如何だね北「宜とも〜人の爲事の辭退のねへ通」然極
りやア供七殿お前の發狂人此方の附屬サア何とか頼まふか子「昔の杵柄うんとこ承知さ物
事よやア題を取て爲くツちやア嗣か出來合を盗んだ様で新作の働きが見へ無から題を出しさせ
へ彌「強氣な意張出したのう通さんお前撰んで呉ねへる通「斯と春雨や仇を笑顔も余まり長た
らしくッて不粹し大津繪も珍らしく無ちよんきさほいもくだら無如何な船よ仕様のう爰が所謂
共和政治包藏無よ吐露すべし〜お前の様よ長への短けへの太いの細いの黒いの白いのと謂た
日よやア根から果しやア無如何でス面〜内證して思ひ付な葉唄を書のを密と聞よして出しち
やア通「夫が宜ろろト各々四人ともよ内證よ紙よかき密よ捨て圖とあして引取ければ一本ッ
前よ指一番腕の供七よて二ばんの彌次郎三ばんの通次郎四ばんの北八なり彌「サア是で極ッ

百二 供親方も前題は何だが聞かして見させへも勝負供、胡塵化しちやア成ねハドレ〜巴等の我物と思へハ輕しと書てある 蓮、是ヤ一強義だ本調子と出かけたんだ余まり品の悪く無方が宜せ然して開化亦文句でもよいと藝者が今晚の有難ふと押出しても唄へる位へで無ツちやア折角作つて甲斐がねへせ供「チット宜〜其邊よ駄ハあし畑虫喰が在たら捨てしまア、若い時よア物數寄で俳偈の点取や運座で苦しんで川柳の一ツや二ツの附會た事も有し歌も百人一首の講譯位へ聞たもが有から慢更てよをばの合ねへ様を任のしねへせ彌「供七どんの太平樂の始めて聞たが随分長へもんだノウ併し替唄の出來榮の早くして呉ませへ供「最出來た聞ませへト懐中より鼠バンの淺刺紙を出して書んとし彌「うらア止て呉ませへ紙さら此方よ有ト半切紙の巻たの巻さし出す

本調子我物と替話

「歳月開けて粹き世の中ハ馬車や蒸氣車てれがらふ郵便走る束の間ハ様子聞たり聞せたり千里の先のたよりでも何の案事する事ハない
どれ〜と三人が手よとりて見て感心し通「大出來〜チア二番聞が彌次さんだ題ハ何だハ開き玉ハサ早ふ〜彌「いやさ聲色を出さぜア迫ささんな迫てハ事を仕損するト彌を聞けば本てうしよて響ハ巴ハ降しきる成けれハ通「ヤ雪ともと當かけたぜコリヤア甘く出來るだらう彌「通君先を切つちやア成ねへせうう云れると程能出來た處が響りめハッ若ぶまが有と拙作無叙

よあるし如何轉んでも埋らねへ題が好からツチ能出來る位から正宗の刀を持せりやア如何様鈍痴氣も千人切が出來る辨用だが然ハ成ねへ莫耶の劍も持手がら鬼馬も乗手がら彌「ヤサ其様を利屈を並べる事アねハナお前の題を讀つて呉さでも云やア仕舞し然ら然よして見く聞して呉ねハナ成ふ事をら斯して洋行する心意氣の如何だチ彌「何きりと望の通り葉唄と來やア此方のもの桐箱入の手を出さぜ最一ツ杯ぞといひツちやア成無よト雲時考がへしが出來た〜ト自慢らし〜さし出す

本調子尊とも

「船を世界よ乗歩行ありか洲が北南あじや、あふりか、さうろつば夜明ぬ國と水海のマ
マ先が見たいじやアあいかいさ
彌「如何だ寸志の有めへお是からハ高見で見物第三番が通さんだ題を廣げねハナ何だぞハ私ハ國さで見せたい物のコリヤア素的だ二上りの極端い元哥だ一番利得るぜ通「夫見ませへ人の題を見りやア是亦自分でも云じやア無か全体二上り云ものハ語路合の能ねハので三味線よ合せりやア不測のねへが只文句で云と可笑い様者だぜ其處をよく承知で無つちやア困るぜ人の者だと思ふと能見へまし自分の者ますりやア紙が見へる處が手よ取ち只野よ置よ蓮華州古今集よ萩の露玉よぬかんを取れわけぬよし見ん人の杖がら見よ彌「通さん宜加減よ心て聞て呉ねへト賣付られ小首を傾むけ趣向する体なりしが

二上りわしは國さのかへ歌

「わしが國さで見せたいものゝむかし神風今やりかたぎすて、開化のまんてる、す
ぼん、やぼり、さいぞへ新聞日誌 ションガイ引
通「マア寸時と問ふ合せやしたか御点削く」彌「奇妙きてれつ上々吉最上飛切古今の秀逸サア
四番が北さん執確しねへを皆此通り揃ったぜ題はよしかチナニ都々一だコリヤア替って面白か
らう併し心意氣を云ふも余まり古風よ造らやア眞平だぜ北」已らア此様愚圖くした氣の露
る事ハ性よ合ねへマア省いて貰ふ通「北さん夫りやア條約よ違ふせ何でも宜じやアねへか
日頃の手際を願ひしねへもト種く」と持かけられ詮方あくく筆をとり
都々一

「蒸氣したゆへ濱から通ふ外よつたふ人もあし
彌「コウ北さん風が悪いぜ是やア濱の假名垣先生の内よ寄食でいる缶亭定岡さんの作だぜサア
罰金くくム、罰金じやアねへ運動乍ら面白立廻りをしねへなト責られて不省くく立上り其
邊等りを見まのして北「仕方ねへ何か遣付可が獨りして居ちやア拍子が抜て間が悪いから
宜加減彌次さん賑やかして呉ねへな彌「チッ、呑込山の寒明是より藝道とり立て御覽入れ
ます其中北八の右の足を懐の中へいれ左の足一本よて踊り乍ら立廻れば通「面白く一本足
の立廻り彌次さん何か一尽のはやし方の無かの彌「有共く一乃事の始めよて抑々王政御一

新一合取ても士の一合呑でも生酔の一言半句が癪の種一天四海が妙法昔歸一六体服一升一菜一
生懸命一世一代一十百千越中禪越前でれつく一字千
金一点瑾なま一升袋の元より一升一杯機嫌よ意地張
づくあり一鐵短氣よ一人當千一本も無のが土器物だ
よ一佛一佛一濟衆生が一連託生か一かな氣かねへ一
々閉口一決極りて一同納得一文措んで一百損する一
類狐で姉がこんく一向談判一念蛇よある一樂かた
りて一服かきて一零藤八一向無茶苦茶此時一同大笑
ひとあり轉がり返りて北八が風体を見て在ば北八の
元より勇み上戸よて何とかして騒ぎ度風なる故今の
浮れ立て足もとの兵兵あるよも構はず涙々浪々一本
足にて廻る機極よ何とかしけん傍らなるテール
の足よ引掛りて横仆しよ轉ける柏子轉がるまいと踏
堪へる手掛りよ供七が天窓へ手をかけ節を執確握
れば兀天窓へ入髪の件あればらくして痛の痛し
供「コウ北八何を爲んだ痛へく離さねへかト身を動搖機曾よ入髪がばつり抜出て階より外



へ飛出し海の中へぞ落よける一同の呆氣を取れて見て在ば 供ヤア此男途方もねへ件を爲じや
 無か人の天窓へ武者振ついで鬚を何處へ飛てし仕舞アがつたサア只今拾つて返せト暫然となり
 て腹をたてば皆く可笑もあり氣の毒なれハ彌「供七さん了簡しねへお北公だつても悪い氣で
 爲といふ譯じやア無斯いふ調子よお互へよ浮れ出した者だから仕方かぬへ 供「外の品どの違ハ
 ア入れ鬚ハ東京中の鬚屋へあたりて能毛許り撰り扱て結つて貰つたんだから減多み代りが出来
 やア仕無況て此邊へ來ちやア日本と違つて拵へる事ハ出來ずト眞自面も成て謂ゆへ彌次郎可笑
 さよ彌「夫なら丁度宜直は開化してサンギリも致やア世話ア無じやアねへか 供「埋らねへ事を
 言おさんな年を取て兀天窓よ入髪をする程の件でサンギリも成れる者か彌「宜共く然すりや
 ア直よ一ツ曲突が出来らアト胡魔化ゆる根が仕陀羅もあき件あれば供七も詮方なく愚圖く仕
 乍ら

重室を札も紙なり入れ髪の髪もうまつよならぬ神國
 斯吟しければ通次郎も取取す

飛よりも早く行れた蒸氣船一本足も無用ありけり
 時よサンキル(夕の食事あり)を知らせる合圖の聞へければ皆く食堂へ赴さける

第十三編

煙の鎖す亞羅比亞海雲の迷ふ亞非利加洲此身遙は青天の外よ在り九方の鵬程一葉の舟と櫻洲先

生の詩よして西洋記行ハ賦せり朝ハ辭す白帝彩雲の間千里の江陵一日よ歸る兩岸の猿聲啼て住
 らず輕舟已よ過ぐ万里の山どの唐乃李白の詩よして同く是天涯の旅況を賦せども其險艱無聊万
 里の波濤を凌ぐ者と自國關山の内よ往來する者との誠ハ雲壤の懸隔あり我日本の船客彌次郎等
 の永き月日を波の上漸く國よ乗り附けて陸よ上れば程もあく又出帆ハ促され明ても暮ても波の
 面海より出て海よ入る日の光りさへ恨めしく先へ出る氣は何處へやら草より出て草よいる武藏
 野の月あつかしく時よ觸てハ故郷の空を眺望て悵然たり只大連の乗合よて笑ひ上戸や泣上戸腹
 立上戸や座睡れ已が様く人として無て七癖私の癖ハ來ると還るが否よある色情話しよ打紛れ
 水の上でも劍でも渡る自慢の負惜みエアタルタルの瀬戸を出て大西洋を一文字祝禱鳴らす音ハ
 早英の港へ着よけり此ハサウスアンプトンといふて當國の都龍動より西南の方ハ三十里許り離
 れたる處よありて名高き港なり諸國の船舶出入りして交易商賣の繁昌なるハ比類なく殊よ此港
 よりハ世界中よ往來する飛脚船を出し又外國よりも飛脚の入津する所ある故各國より貴賤貧富
 の旅人一年よ出入する事幾千萬なるを知らず且船の修覆塲數ヶ所あり何れも洪大ある構ひよし
 て學問所も盛んあり蒸氣車よ乗ば一時の間ハ龍動の都へ通行せらるべしといふ都て歐羅巴の諸
 國よハ蒸氣車の路縱横よ連ありて自在あるゆへ旅行するどて杖笠草鞋の用意よも及ばず其儘車
 よ乗て百里や二百里の道ハ一夜の間よも行かるべし旅人宿屋の模様ハ色々ありて上の旅籠なれ
 ば一日の賄ひ一人よつと二三兩下の旅籠されハ一日よ一歩斗り又大勢よて長逗留をするよハ貸

座敷を借て手賄ひよするもよし先づ宿屋も若すれば店の帳場もゆきて名前を記し部屋の鍵を請取り其部屋へ案内させて荷物等も部屋に入れ一ト先落つき其後出入の節に必らず部屋の戸を鍵を落す部屋々々よ一々番附あり大きな宿屋よの部屋の數五六百もあり部屋も居て宿の者へ用事ある時の針金の糸を引き鈴を鳴えて人を呼び食事を部屋へ取り寄てもよし又食事の間よ出て大勢と一所よ爲もよし但し食事を部屋へ引けば旅籠代少し増べし扱も廣藏等の着岸の上旅籠屋よ着き大勢の事なれば座敷も三間程借り切り其一間の廣造が居間なり一間の彌次郎等が居間なり一間の荷物其外手道具の内よの不用の品々を積置處とす廣造が居間よての先着岸の祝なりとて例もの如く酒宴を催し歌ひつ舞つ大騒を彌次郎喜多八の雨人の取分て飲むと目のさき男ゆへ十二分の酔を發し調子よ合ぬ聲を出し喜多「いやだくよ畑の芋の冠り振く何としよ子が出来るコイ」彌次「高イ山から谷底見れば瓜や茄子の花盛サ、やアとこせいよいよや廣」コウお前達の飲で騒ぐの宜が然あよ何かを踏飛して躍るのの困るぜお酌「アレサ彌次さんアレサ悪巫山戯をしちやア成ないよ夫あよ大きな聲を出して耳が聳れううだのチャレ睡を人よ勿かしてサと謂よも掛れば兩人とも益々大きな聲を出して浮れ廻る中猶々酔を引出し其儘其所よ打倒れ大勢よて臥ければ通困るじやアねへか彌次さんオイ北八さん狭へ處へ轉がつちやア仕様が無いな最少との辛抱だアな起ねへかト揺起せと兩人共よ一向またわひ無有様故無擦頭と手足を持荷物を入持部屋へ速行其儘よして寢させしが暫時して北八目を覺し其邊を見れば彌次郎一人

倒れをり荷物の中よ打臥たれば如何とも合點ゆかず暫時考へ漸々と心づき愛の英の旅籠屋よて先刻着岸の祝ひよ酒宴ありて酔倒たりしが其後の一向何事も覺へねど定めし座敷の邪魔なる故此所へ連來られし事と曉りぬ奥の方よてのオエ酒のつまらぬと見へて騒の聲の聞ゆれど酔覺の故よや薄寒くのなると淋しきよ北八「彌次さんコウ起ねへなト揺起せども正体あく寐返り乍ら何か無よやく寐言を云様子故北「彌次さん如何したんだ些と儘よ成ねへや否を男しやア無か烏芋を半分口へ嚼ひてマア汚無じやアねへか頰側へ飴掛の露をくッ附けてサ足袋を片足はいてサトぐすく」云ながら抱き起せば漸々よ目を覺し彌「誰だ北八か北」如何だへ氣が付たかへお前も已も強氣よ酔潰たつたのウ彌次「愛の何處の座敷だらう何だか狐々よでも黙された様で分りアしねへ皆の如何したんだらう北「已も只今日を覺したんだが例もト違つて已もお前も酔過て倒れた者だから仕方なしよ茲へ祀り込れたんだらうよ彌次



刻の始末いごんを懸梅たつたのう北「然ッ巴も一所は愛へ持込まれる様を譯合ひだから儲めやア覺へぬへが何んでもお前がヤアとこを歌ひ乍ら瀬戸物を叩いて井を二つうち毀したのまで知て居るが跡の如何き事を爲か知れなしねへ所で詠やした

「連中の擔ぎものかや二人とも荷物の中へ打込れつ、

時彌次さん漸々の事で今日の英吉利の地へ若たから博覽會に出掛たら面白い件が幾等も有るだらうノウ彌次「巴も夫が目當で遠い海へ浮れ出したんだが此間通さんが話して聞たが此地の世界第一の便利をして居る蒸氣の工夫を仕出したワットといふ人の生れた處ださうだが彼位へ奇妙な案文(案文といふ思案工夫といふとの心得よて云へし)を考へる者さへ有のよ何か考がへ無ッちやア外聞が悪いじやねへか北「夫ア然だけれども蒸氣の考へ處じやアねへ一寸とした酒落をしてせへ失錯から彼様事が何で出来る者じやアねへ出来たつても一年や二年で間合やアしめし夫亦運るい事の東京見よやア姓よ合ねへ何でも手取りが早く一寸とした工夫で利益よも成といふ事で無ッちやア詰らねへのも野「夫やまア然よ併し狂歌を詠だ處が洋人よ解る事ちやアあし何かで畏がし附て道てへのチ夫よしちやア如何だらう日外横濱で九一が(九一とは太神樂の獅子舞の事)鞠を使用のよ驚いて西洋人が考がいよの手練でするとい知らず鞠の中よ何か仕掛が有と思つて鞠一ツを十五ドルで買て中を割て見た處が何よも不思議の無ので落膽したさうだが今以て何か機關が有よ違ひの無と云ので西洋での新聞紙は送續て評判だといふ事だ

が如何だらう己達が其九一の大將だと云觸して鞠を拵へて賣ッて見ちやア一ツ十五ドルの相掛だが此節の日本毛鞠の景氣が宜柄と謂て二十ドル位は賣付たら國へ歸つて吉原へでも出かける兵糧が出来て其上は活馬の眼を抜お月様を一つの世界だと窮理する位な西洋人の鼻毛を抜と云のは随分功名じやアねへか北「是や面白い計略だ(けいらく)といは計略の心得よて云あるべし)併し鞠の何れ赤く無ッちやア極り方が附ねへが切れがねへぜ彌「夫ア絹呉絨でも縮緬呉絨でも宜じやアねへか喜多「何の人西洋よやア無者だと云ので洋人も張込んじやアねへか日本の物で造爲ちやア是斗りの成めへぜ夫れりやア茶味ッ子酌の積鼻樞を外りうじやアねへか彌「汚穢ねへ事を謂なさんを長編絆か何かを胡魔化して夫丈の事さへ遣りや宜じや無ねへか鞠を一ツ賣却りやア譯やいねへ夫が宜らうと兩人よて相談きまり縮緬の長じゆばんを取り出し細かよ切り裂き鞠の數凡う百ばかりこしらへる手段なり一ツ是で大概極つたが何か九一の招牌が無ッちやア成めへのウ北「然さ如何き懸梅よ仕やう彌次「九一だから九の内へ一を引てするんだが一寸奇麗よ見せるよやア染ぬきの縫付でせけりやア調子の悪いが其様御大造な事を仕て居ちやア間よ合のねへ如何か宜手際いねへかの喜多「然さら當時日本でも祭りや何かよやア赤い玉を書た旗を樹るから夫よ摸擬て大きく赤玉を拵へて門へ押立ちやア如何だらう彌「夫よまぢやア切が少し斗りじやア足る筋じやアねへが拵ア事いねへ最う一枚扇して仕まへと又くお酌と茶味の備伴よて大きな玉を包む物とあしたり北「夫い、がア中の眞よする物がねへ彌「長く小

せへ鞠の方を坐蒲團を二三枚程いて其綿でして看板の方のマア籠よしても宜が竹が有ると云
 でもあじかうと暫く考ひ己が寐まき綿入の二枚を持って相應玉の如く捲らへたり如何だへ飛だ
 思ひ付だらう斯云ふ工夫の有る者をなせ職事院から迎よ來ねへたらうと思ふせ彌「呆れらアお
 前の綿入じやア劔香だぜ」風が外へ這ひ出した日よやア赤玉へ星が出たのかと思ふだらう月よ鬼
 の宜が日は風の些と汚穢へ取合のせじやア無か併し大陰曆のお月様の御慶して鬼から租税が出
 るから風の方が宜かも知ねへ況て貴様のの大分孕み有りさうだから西洋へ鞠と一所賣り込
 むと宜商法よあるぜ北「人を馬鹿よしねへさ日外かお前と一ッ所よ寐たら移つたと見て痒ッ
 て船の中じやア有し困つたぜ彌「笑ひるぜ」ヤツボの裏から足袋の底まで移る奴が有るものか
 丁度一首出來たぜ
 「十五夜も弓張月の新曆よ玉の鬼の住所をし
 北八も又口吟て
 はまりこむ人を見つけて利得ときりのつかいうちんだんまり
 鞠

兩人の余念なく鞠の細工を仕たりけり
 鞠

彌次郎北八の兩人の英吉利の地へ到着の手初めよ十分の利益を得て諸人よ誇らんと思ひ内密よ
 て太神樂の手鞠を捲らへ看板よの赤玉の印を門口へ押立んと工夫なし細工の最中へお茶美が用
 事ありて荷物の部屋へ來り戸を開いて這入らんと思ひ内を覗けり這如何よ彌次郎北八の二人

の諸肌ぬきよて頭よ鉢巻をなし何か捲へる様子座敷よの一面よ赤き物をまきちらし白き物取り
 廣げて有て外より人の覗くとも知らず一生懸命の趣功ゆる何事やら一向よ合點ゆかず定めし狂
 氣の沙汰あらんと恟くり仰天まて早々廣藏が所よ至りお茶美「旦那大變が出來ましたよ おし
 やく」コレサお茶美さん何だ旦那の羽織の上へ居てサお前はん顔が直青だよ お茶美「何だ處
 じやア無い子いさ荷物の部屋へ出す物が有から往つて戸を昏て見ると何だか知らぬ赤い物
 と白いものを座敷一杯よ流れて居て彌次さんと北八さんが肌脱で鉢巻をして掴み合て居たのね
 儲二人で喧嘩をして怪我をしたんだ白いのは體の肉を掻むしりて赤いのは血が溜まつて流れた
 よ違ひないよと片息よなりて物語れば廣造らむつくりして廣「夫アサア大變だ如何をと仕
 出來したんだらうと廣造はじめ一同よてかの部屋へ來りて見ればお茶美が話しの如く二人の大
 汗よまつて何かして居たりければ廣「コッお前達のマア如何したんだ盛をかけられ驚いて彌次
 郎北八の二人の二人」へ旦那ですか是の少利益口が有て徒らを始めやしたか頼て巧名と御覽
 よ入れやす中く凡夫の智慧で譯の解る事じやア御座へせん 廣「彌く狐惑よ違ひねへせ通公
 如何したんだらうコレ兩人乍ら一向分ら無じやア無か大造鞠を見た様な物が出來て居るぜ然し
 てマア此大きな赤玉の何だへおしやく」いやだ妾が長襦袢の半襟が落て有よ如何したんだらう
 オやお前はんの半襟も裏も散くよ成て居るよ此人違ハマア何を爲んだへ氣味が悪いじやアな
 いかお茶美「オヤ」厭だよ其赤い切れは私達の長襦袢の表だよマア如何したんだへ此様よ細

「切て仕舞て私しや濱を獲つ時よ旦那は敢て七兩三分で拵て貰つたんだわね親より大事
 を細絆たよサ只今元の通りよしてお返しと涙ぐみて兩人が胸元と取りてせめかくれば廣造も呆
 れ返り如何なる事と元知ねば隣を問ども兩人のづれた事との氣も付ず泰然くさりて丸一の譯柄
 を云けるよぞ一同の呆れ果て通馬鹿を謂ふさんる濱で靴を西洋人が買込だのの未極開けきい
 時のとで今時然も頓痴氣が鐘大鼓を叩いて迷子を捜す様も歐羅巴中級の草鞋を穿て尋ねたつて
 有ものかもしやみ旦那私達の長靴絆を如何かしてお呉なさいな廣仕方がねへ巳が纏ふより
 外ねへ別拵いて遣らうよ併し愛へ來ちややア縮緬の無から外の物でするがい、もしやみ
 「厭ですよ私しや呉紹や何かじやア廣うの代り二人よ正金で小道を遣らうよと廣造が扱かい
 よて漸くは事すみける彌次郎出たらぬよ
 欲ばつて餘まりのやく切る細絆早まり過て今のあやまり
 北入も同じく

しくじつて面目もなき細細工人よ問れて顔の赤玉

夫より皆々一日の宿元よて休息あし明日の博覽會へ出かけんと相談まてある所へ一人の見なれ
 ぬ異人出來り異人へウフウウトセーコーヌペハーホイッナアイヘウピンチヤシットムマイ
 ムニコトといひければ通次郎異人よ向ひ通アイヌムウヘリチアファイシットハウマツ、イツ
 ナイス異人「イトイスハイフセンツとい、て異人マンナルの殿しより西洋紙へ書た物を取出し

通次郎は渡しければ通次郎の五錢の銀を一ツ渡しければ異人の座敷を出去りけり彌通さん今
 の人の何だへ通彼の此家の番頭さんよ愛へ着した時よ主人よ頼んで措た博覽會の番附を賣り
 よ來たのよ博覽會へ出掛るよ先番附を讀んで大体の物品の位附を心得て居ねへじやア聞から棒
 で口外か淺草の奥山でエレキタルの趣向を見よ往つた時の様よ一向分る事ちやアねへ北「夫やア
 有難へ一寸と見せて呉ねへ通西洋の博覽會と云もの乃万國から奇妙よ奇妙といふ物を自慢で持集
 めるのだから給よも斷しよも盡せる事じやアねへ貰ふ夫ア胸りするぜ然いふ譯だから中々番附
 を讀んだつても萬分の一だがア少し許り讀んで見やせう先一体の品數の天造の靈妙人工の精微
 産物の豊備學藝の高尙なる各國共よ其得意を示すべき目途あれば數々ある中よ其の自國の事な
 る故十分の半なり佛の六分の一宇漏生。白耳義。南北日耳曼。聯合州。澳斯多利の何れも十六分の
 一魯西亞。米利堅。伊太里。荷蘭。端西の三十二分の一よ過す墨是可。西班牙。都兒格の其半よして
 葡萄牙。希臘。丁抹。埃及。巴社。亞弗利加等は又其半ばよ過す北「コウ通さん厭だぜ〜十六だ
 の二十だの勘定高の止よして早分よ遣て呉ねへ通「ア厭ッて聞ねへ是だ大町小見世の位附が
 分るんだやち馬よ口を出すから何處まで讀だか句切りを見失したオットコレ〜我邦の區域も
 是等と同等よしし之を支那暹羅兩國と三所よ分ちて排列する物凡う物貨天寶より口用の雜品學
 藝よ係る諸具或ひの自然の化育よ因て成る物或ひの窮理の上より神を極め精を殫して造りし物

二百四十

此會も出せる物品の何れも功智を窮め奢靡を盡し廉價を世界も博めむとす故も蒸氣機關の如き
智機の益工意匠の慘談看破すべき所なり亞米利加より出せる耕作器械綿織器機ハ就中の入目を
驚かす油繪の歐國最も珍重する所よて各國より有名の肖像又ハ景色等を出し其古代を模寫し又
宗旨も關係する事跡又ハ殺傷の体或ハ絶世の佳人有名の山水など當時譽れを揚し大家現今の
良工の筆跡あれば其優劣固より評し難く彌次「オイ」うんちよ堅くろ敷云ちやア何だか珍分
漢で無面目もツと優しく云つて呉ねへな道「能色」を事を云ふぞ大道の野郎万才か豆蔵じやア
有めへし馬鹿々しく下卑て讀める者か跡でよく聞して遣るからマア待なせへ佛蘭西より出せ
る戦争の大圖ハ其人物大きき眞の人と同じく其肖像も當時の將官と寫眞せし品よて敵味方交厚
入り乱れ奮闘蹂躪する体彈丸破烈壓死の体大軍血戰の景狀等遺す所なく描き出し死尸道ハ横た
はり炮烟天ハ限り其勢氣動容宛然實地よ見る心地して半ハ壯快とし半ハ物凄く見ゆ金銀古貨幣
ハ羅馬希臘都兒格最も多く亦金銀よて製作したる物象人像或ハハ器用ハ備ふる物等夥しく我
國の大小判一分銀二朱金一朱銀も列し此「通」さん餘まり長たらしいぜ大判小判一分二朱金の位
の品多く商賈往來が聞て呆れらア宜加減ハ胡魔化し込じやア成ねへぜ「通」騒々敷男じやア無ハ
最う少しの辛抱は是ハ此度の道中双六の目的だから殺生石だか跡を残しちやア置れねへ尺度量
衡も各國現ハ用ゆる所を聚めたり服飾器玩ハ巴里斯精工の名を擅まする處されハ殊ハ其者ハ
極め廉價を極むるの物品金銀珠寶石玳瑁珊瑚を用ひて製作せし物よて希世の珍稱すべき物也

二百五十

ふるハ暇あらず珊瑚の製作物ハ伊太里の名産よして其種類最も多く出せる又同國より出し天造
物中孔雀石の大きき合拍余よして長さ三尺五寸許りなるあり亦奇觀なり學術器械ハ就中人身解
剖の眞形を摸せし紙細工など精工無比と覺ゆ外部ハ徭律自適あるより遊園ハ地球上よあらゆ
る植物動物を萃め博物學者の考證ハ備へ討論工夫の種とし培養種裁の理を發明せしハ宮殿亭樹
堂塔家屋ハ万国各風ありて彌「通」さん待て呉ねへ灸點手一束トウ「痒」どの何だへ「通」弱る男
じやア無へか宮殿亭樹堂塔家屋との立派な御殿や奇麗な座敷五重三重の塔や只の家作りといふ
事だ彌「只」のかち栗でも多田の満仲でも宜が物巻りハ讀で仕舞て呉ねへ耳が莫臥てきた「通」ヨ
レ「厄介」な連中だのうお前達より此方の口が草臥る愈「ハ」お終りだ其次のコウト文賢儉着自
ら國体民俗の趣向を異とするを示し特ハ智識を長せしむる耳ならず亦万里を咫尺の中よ約して
五族相交るの誼を知らしむると謂べし此會ハ物品の優劣工藝の精粗を比較考訂するのみならず
學藝上の諸科も世界の公論と日新の智識よよりて古來よりの疑問を決し或ハハ靈妙の新説を踏
する爲め英吉利有名の學士藝人の勿論各國より來集せる其科の名家を聚めて裁判者鑑定人と
し有象ハ種類より無象の原理よ至り考證格物蘊奥を盡するなし「夫」より通次郎ハ新聞紙を下
おき「通」マア日本語で謂て見りやアざつとこんなもんだが強勢じやアねへか「北」成程漸しよ
聞たより素的物だか通さん己らハ壁文字が讀ねへと思つて偽を讀んじやア成ねへぜ「通」馬鹿
を云ねへ夫だから野蠻で咄せねへ連中だ是所じやねへ印度や亞非利加邊りの熱帶の地へ往た日

よア長さか十丈位も太さが三丈位へお大蛇の味増漬があること北「宜加減を慮る言ささんな
 其様な大きな物を如何して喰んだらう通「夫アお前
 余所國へ軍までも出る時の兵糧を遣ふ時分は晝食の
 總菜よ爲んだいの夫で無ッちやア十萬も二十萬人も
 拒出して軍をするのだ煎豆腐や蛤鮓で押付く沙汰じ
 やアねへ北「然かのう何だか擔がれさうだぜ通「狹
 へ事を云ひささん他から不開化な者が博覽會へ出
 かけると向くりして眼を廻すんだ世間の廣いだらう
 じやア無か僅な海を隔てた琉球送りでせへ五六尺位
 へお海老が在て其形の龍を見た様で又三四丈位お茄
 子の木が有ッて實の西瓜より大きくッて取る時よア
 ア桐子を掛て登るんだとさ小さい舟の帆柱の大槓茄
 子の木で拵へて麥なんざア長さが一丈位も延るんで
 知の中へ這入ると竹山の様へ虎おんぞが晝寐をして
 居るとさだから所替れば品替る大きい蛇だつても有
 ん違へおへ北「だがね味増漬の變じやア無か然お大きな物を如何して置るんだらう通「夫アお



前蒸氣船の古いのか何かの中へ爲んだらうよ北「夫よした處が灸くのは弱るじやアねへか通、
 其時よア放火して焚うちや何かの時よ鐵の橋の様な物を渡して其上へ横よ寐かして灸くんた
 らうよと口から出まかせと虚と實を減茶苦茶おらへ立れど諸共よ知らぬが佛眞面目ようけ願を
 解いて聞おたりしが其後彌次郎の北八よ向ひ彌「先き通さんが讀だ番附の様子じやア博覽會の
 余程不思議な物が有よ違ひねへ如何だらう已ら違も何か持出して洋人を驚かし付けて遣へが早
 速好工夫も無のッ北「宜いな其品を見せねへからッても評判をさして是くを者か日本よ有と
 爾て新聞よでも書して遣らうじやアねへ愛の亭主の横濱よ長く居たんで日本言葉よの大概通る
 と通さんが言たッけが丁度宜兩人で主人よ應接して宜加減なごまかしを吹て遣うじやア無か夫
 が宜らうと兩人よて主人よ用事有故對面したしと言込みければ取次の異人早速よ主人よ斯と通
 じけれバ何事やらんと席へ通し客人の事おれば丁寧の授接 異人「アイ。エイ。コウ。ホルスト。オ
 イム。アイ。アム。ウ。ヘリ。オ。サノ。フイロント。ホール。ユー。ワスター。イン。ク。イン。ヤ。ス。イ。ム。ヘと始
 めてお目よ掛りますお宿を致して有がたふと云ことなり兩人「私達の未だ洋語を知やせんから
 何卒所々わかれば宜げすから日本語で言つてお呉ませへと云ければ主人のほ、笑み乍ら兩所
 のおいでよ成まの如何成件と問ければ兩人「別の事でも座へせん今度博覽會へ出掛て來やし
 て番附を讀で見やしたお素的お物揃ひで流石開化の源だけ有て感心致し升た併し日本も此節の
 大きよ開化が進んで來やしたから種くを器械が出來て蒸氣や鐵道電信機ハ勿論寫具其外大概

二の西洋の模倣も成りした夫より日本の古い國で神武天皇から推古三千年近くして其前より神代と云
入十百二 時が天神七子代地神五子代合して三百五十代其間の年代の確然とやら知りやせんが并々アオ
千万余許りを備へ備の船が風をこき無ちやア追付きやアしやせん其位古い國だから珍貴珍
品奇珍奇手刺肝心釘の要石と云物常陸の國鹿島といふ所御座へす夫の水戸黄門様といふ細
一家様地獄の動けぬ様餘の頭へ打込んだ柱を掘りても根が深くして段々大きくなつて
目方が三十三貫目で長さが法性寺の入道で中々博覧會へ持出す程少許な無益な物とやら
座へせん又學生の飯といふ物の釜戸焚の命が東景征伐の時不測を顧りしやした真田美村が張
拔の筒の關東の百万騎を長坂橋の上で二白眼よしやした奈良の大佛の大きい事の世界より此類の
御座いせん頭が金で手足が赤銅で腹が四分一で陰囊の丸が蒸氣の釜より大きくす又東京の猿
草の長さが八里半有や長門といふ戸板の長さが三十里許り幅が十四五里頭が下の關と云や
す置所亦有やせんから中國のといふ外れも横一床かして有やす四國の内もやア三千万石許りも
固た水の阿波が有やす其外氣越な著の越後の七不思議本所のばか嘶し飛鳥山の洞穴措てけ堀馬
鹿も付る姫籠の粉薬でも丸薬でも脚氣の症が四方有やすから一色五病の妙薬に在ても是やせん
最一段奇妙な品物の灰吹から出た蛇が一雄雌の鼻揮し桃太郎が分取で山の芋の鱒も化たの
や節狐から飛出した駒味増も成た牛の糞糖の中へ打つ釘豆腐の謎も馬の耳の念佛千枚張りの面
の皮提灯と釣鐘の天秤按摩の眼鏡四角な玉子狸の腹裏役者を黒焼もした惚薬の蔓へ結た茄子巨

健辨勝火吹達塵掃塵の杉原奈良月長門の牛甲斐の駒備中の鏡近江八咫庭訓往來賢評教師の入道
魚説教合物相傳胡瓜圖解牛屋雜談安愚樂鏡今童戲百人一首妙々不思議の書經まで中々筆紙も
されずと止度の無事許り並べ立てと語りける彌次郎筆を執て
有物を出すの不思議の中ならず無を顧りす舌ぞ妙なる

第十四編

英國の都龍動の萬國第一繁華の地にして府中の長さ四里幅三里も出入し東部西部南岸の三大部
も區別し人口三百余万大小寺觀六百八十六公學二百六十私學一千五百武器庫百五十五演劇場二
十二市場二十四貿易及び製造局七千七百箇も下らず人家櫛比し三層五層六層も至る往來の繁雜
肩摩轂擊眼を眩じ耳を聳し其景象比するも物なき加之龍動橋の下流も河底を通じて二條相
接したる隧道あり(とんぬるの水底を穿ちて道を作り往來する所をいふ是橋をかくれば大船の
出入からざる故なり)且また屋の上を通る瀛車あり地下も設けたる鐵道あり又築造の元も閉麗
ある物の「セントポールス」寺の圓塔なり其高さ六十一間四尺圓經二十四間一尺にして中央に柱
を用ひず内面も五彩の畫圖を以て是を飾り又内外とも彫刻の石像を以て裝へり此近傍も巨大
の銅像あり高サ三十四間内も螺旋階ありて上も大なる寶壺を安置す製作の妙市街の繁昌更も類
ひの在ざるあり扱も彌次郎等の旅籠屋も在て休息をし彌々博覽會へ出掛んと皆夫々遊歩
の用意をさしぬる時彌次郎の北八も向ひ彌々北公已もらち前も西洋廻りも出掛る時早く

乗り付て此方の景氣を興込で國元へ歸つた。世間の狭い奴らが夢の覺醒は歐羅巴の評判を聞かして遣うと云了簡だから先へ出るのが樂みだつたが昨日届いた手紙の中は書で在た東京の景況と見ちやア余程皇國の方も開けた。進ひねへ同じ開化の世界なら古郷へ早く飯りて遊ぶ方が宜じやアねへか。北彌次的貴様も變り里心が付いたじやア無か。昨日の手紙の文句の慢更形の無事でも有めいが通さん。宜加減は胡魔化しを讀聞たんじやア無か。彌「何の人已らだつても仮名の讀めらア崩言たと思ふなら最う一ツべん巳らが本字の處を殘して讀んで見せやう。側なる手文庫のうちより取り出し

月より日改まて行東京の流行物の其中は三重五重の煉瓦石五色の光りのペンキ塗門松更りて琴柱形飾る推の葉柳の葉棹の葉の提灯や赤い物をば釣下て屠蘇の祝ひの葡萄酒やビール、サンパン、アルコウル麻上下は大小のマンタル、ツボンよシヤツボあり羽子突娘さん牛を喰ふ尻つく番頭地獄かい日本橋とい昔の車馬車道歩行道三本橋新橋昨りが鉄ならす淺草見附や昌平橋万世かたき石の橋二ツ穴ある眼鏡橋一ツ目二ツ日輪輪首化物屋敷も貸店と替りて出金雜作金十圓五十百圓と賣れた鬼の拾られて豚を怨や心申さじの羨込の二ッ本三十と直段は上る有がたい頼みと思ふ。お月様の大陰曆がら廢して三十日は少し顔を出し十五夜でさへ丸くなし暮のお餅んたれ込で杵と臼とが茶を挽惠比須大黒親分としたる鼠の運上の出ぬのが福の徳となり東京兒の少

を出しからと豆腐のから直うちさし晝夜眼鏡や貝細工麥藁細工玉子の吹取り向島上野の生醉夥多し新たは開く温泉場一宿二宿居掛けの保養が却つて瘡の種隠し賣女の禁制の御布告書けば用捨なく二圓の鑑札娼妓と立身させて十二月數万の寶劍丸呑み。天僧正何の其白い鈍血を吐出し智識を開く學校の八百八街は男女とも兒童を進めて學藝の道の盛んよかり申當時の有増穴賢

北「成程強儀を景氣も成たのうちでも新造娘が牛を喰ふや温泉場の養生杯ぞの面白いじやアねへか。斯漸く開けて來やア女の方から男を挑いて野郎の娼妓が出來て鑑札を受る様も成。違ひ無ぜ彌「大丈夫だ安心しねへ貴様杯ぞの方へ其様を株の廻らねへ何程茶人が在たても色の黒い鼻の低い天窓も元げの有る金帯眼を耳病と出尻で口の臭い足が十二文半甲高て山葵あるしを見た様は掌のざらつく遊蕩者よ惚れる奴が有者か。北「愚坊めイ面貌で色が出來る位から納升や國太郎もやア世界中の女がべた惚れと來らア彌「マア待ちやアアな兎角總路の心意氣が聞て呆れらア貴様が心意氣もやア高利貸が尻尾を下げて降参して居らア北「余計な事を云ひねへ。借た物を返す様な定石をうつて器用お世渡りが出來る者か其處で一首こじ付けた

借た物かへさぬもよし前の世でかしたる物をとると思へば
今の世でかりたる物の後の世で利足を附てかへすへき哉
彌「夫ア宜が今じやア日本の着物で渡つて來たが開化の本店と謂れる英吉利へ來て龍動の町中

を此形で歩行のも極りが疑いじやア無か北「已等も強情でハアノの筒纏衣さんさア袴中の料
 彫は對しても着られる物かと思つて居たが斯う余房の國許リ廻つて来る中よア余程極り方の
 わりい事が幾計も在たが強忍をして居たが實ア疾から然思つて居たんだ彌「夫よしちやア皆よ
 被掛をして買ひよ行うじやアねへか北「夫ならマア大体献立をして見様じやアねへか（献立と
 の前かたよ預じゆ事を定めぬくといふ事也彌「貴公の何様か風は仕様と思ふんだ北「謂て吳ん
 ねへマア帽子がアツコよ服の仕方がねへ矢張羅紗だがツギンとチヨッキの縞の好縞を撰んでマ
 ンテルハ露茶の極上と爲んだ靴は象皮の絹ゴムサ杖のウニコウルも金摘みとして跡の時辰儀だ
 が逆も押つか無から天保銀を附て指んだ左様で無りやア磁石を附るんだ然して町々を素見して
 歩行時よ矢應よ出して方角をみるるあんざア如何だらう彌「マア宜加減又紛かして來様ト兩人
 して案内人を連れて出行彼此と見廻す中よ衣類等を賣る相應の店有ゆへ其家は立入り品々を買ひ
 求めて返り已が座敷よ於て先着て見んと取り廣げ先マアツギをとりて冠りければ彌「オイ北公
 シヤツボの跡よしねへ赤裸で被つて居らやア間が悪いじやアねへか北「同じ事マどうせ何時被
 るんだ彌「うれじやアね前マアツギを頭から被つて着るのよ困るぢやア無かト謂れてマアツギを
 脱ぎ捨漸よして残らず着附音を穿んとせしよ片足の音入らざりければ北「マア是やア笑まいた
 やア無か如何しても這入やアしねへ彌「白痴を云ねへ赤足の形を踏で足よ合して先さも片足這
 込て見て買て來たのよ然赤奴が有者か馬鹿の大足も厄介だのりコレは乃穿のを見ねへト云

んせせしよ之も亦片足の良れども片足の分這入さるや如何なる故と云とを知られども這人とい
 るも北八は極り悪しと思ひて無理よ穿んとすれば足
 の甲と指の痛き事限り無く二足三足歩行けれども中
 々以て堪難く彌「成程是やマ妙痴氣輪だ成ねへ
 北「夫見なせへ這入アしめへト謂ければ彌「次郎の
 眞赤よ成りて腹を立て先刻買物よ出し時案内よ連し
 宿屋の手代を呼來る此手代支那の人あれども宿屋の
 手代なる故萬國の言語よ通えたる者なり彌「コウ番
 的人を馬鹿よするも大概よしねへ赤ト出し抜よい
 れ不思議の体よて手代「如何致して御容様を大切よ
 爲が私し其の家業何か不誠法を仔細ても沙座ります
 か彌「白馬ツ菴なさん此様物を香負い込して如何
 するんだ下己が香を脱で手代の眼の前へ投出しけれ
 ば手代「此靴が如何致しました彌「如何も糸瓜も有
 ものか此様な靴ア穿やアしねへ片足の能が片足は此
 通り指も甲も皮が磨りむけて血が出らマア此様な事のおへ爲よ然入の案内買の外よトロをニツ



遣ったちやアねへか只た今宜代物を取替るト謂る、故手代の合点行す先刻買時よ能く撰みて
求めたる品なる故手よ取上れば彌次郎が穿たるの左の方の靴許り北八が納たるの右の方の靴斗
りある故手代の可笑も堪へず乍笑「手代」每公方無理ない戯だんを成ッちやア成ません御兩所乍
ら片足づ、穿違ッて居ります尊公の右の足へ納る靴斗り尊公の左の方へ納る靴ばかり兩
足が片足づ、此取替なされば宜しう御座りますト聞て兩人共始めて氣がつき片足づ、取かへて
穿ければ何無穿りて心能ゆへ兩人とも氣の毒あり間が思しと思ひけれども例の我慢者ゆへ彌
夫りやア已らが遣付ねへ事だから悪かつたが一体何ちの足へでも穿る様で無ッちやア急用や聞
夜で穿時よやア聞よ合無から矢張日本の下駄の方が宜杯とへらす口しければ宿屋の手代ハ筆を
とりて

はく靴を右と左りと知づしていはりちらした論鈍の客
道理よハ勝れぬなれどめつたよハ負けたといわぬ日本魂

兎角する中廣藏等が仕度調ひし故一同打連れて宿屋を出る事との成りぬ
北の冥魚あり其名を鯤といふ鯤の大あるを幾千里あるを知らず化して鳥となる其名を鵬とい
ふ鵬の脊大よして幾千里あるを知らず其翼ハ垂天の雲の若し是鳥海氣動いて颶風の作るとき風
力よ乘じて南冥よ徒んとす其羽撃して海面を離る、時水震動すると三千里あり扶搖を搏て上
ると九萬里飛び去りて後六月を経て始めて息よといふ桐と鶻鳩と之を笑ッて曰く我決起よ飛び上

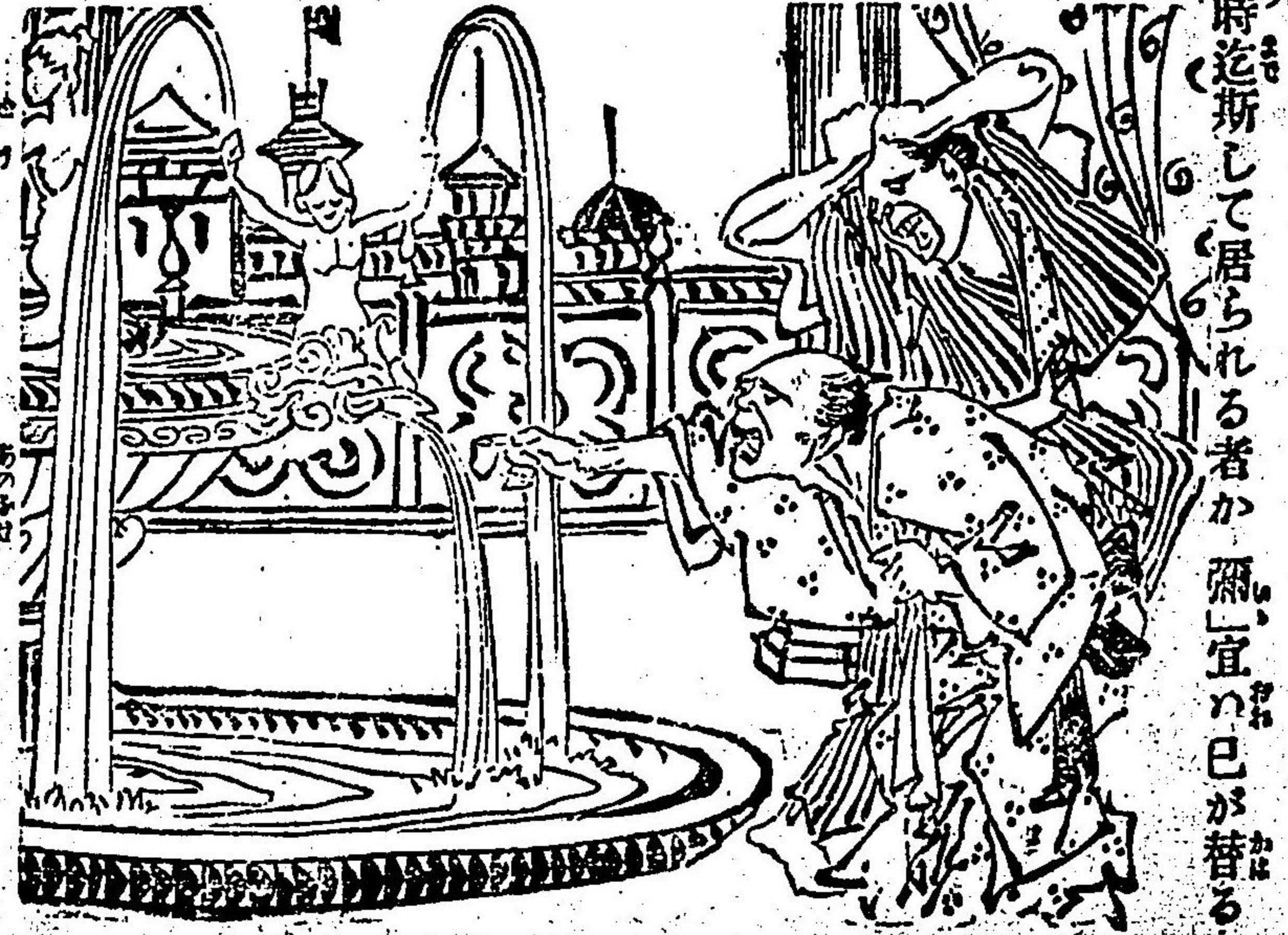
ると數似よ過ずして下り蓬蒿の間ハ翱翔す此又飛ぶの至りあり何ぞ之九萬里よして南ずることを
以て爲んやと云り是ハ南華が逍遙遊の話を録録たる比喩品なれども世間ハ間ある件よして已
が腹の小さきよ引き比較他人の大量を解し得ず却て誹り笑ふ者あり然れども此よきてハ可あり
彼よしてハ可なり皆應分ハ一理屈ある者されば何れか是なるや何れか非あるや儘か説ハ定め難
し浮れよして世渡りの彌次と北とが逍遙遊彼の南冥よ非ずして西の洋へと飛出し人の笑ひや世
の戯り心よ留めぬ無輸方風雅でも亦く洒落でも亦く身籠氣ま、ののほ、んハ世の中の御厄介心
余りて智恵足らず意氣過ぎ者の境界ハ耻も未練も白真弓跡ハ引ぬ張り強く失損事のあり勝ハ
東男の本色なり北「コウ彌次や見ねへハ西洋の宿屋と云もナア索的ハ大きいじやアねへハ此
廊下よ見た様な處をぐるぐる環りて向ふの方よ見える二階も又其先の三層も矢張り此家の構ひ
内だぜ彌馬鹿ア言ひねへ彼ア隣の町内だらう此所から幾位離れて居ると思ふ二三丁位ハ有だ
らウ北「夫ア然だがアノ夫西國の俳優だとかいふ赤いマントル着て黄色と紫の筋の這入たズボ
ンを穿て来た客を此家の番頭が坐敷へ案内するッて引張て行ッたがあれア二階よ居るじやアね
へハ彌「成程是ア矢張り一軒か知らん然して見りやア強氣なもんだ北「アレ、今此處を通ッ
て行た廊中の縋れた襦袢を見た様な物を腰へ巻つけた女異人が向ふの二階の手摺よ倚て居るアレ
、此の見世の先よ二人でフランスの口から洋酒をあふり附て丘丘、し乍ら地びたを踏で踊
ッて居た異人が今此を通ッたが向ふの二階へ上ッて女異人と椅子を並べて居るやアがるアレ、

「だッても男異人と女異人が彌、宜加減よしねへな女のねへ國から來やアしめへし外聞の悪い
 北、夫だつても朱髯縁眼の癖、厚皮面じやアねへか彌、云して置やア馬鹿くしい頓痴氣じや
 アねへか伊賀越や遠目鏡じやア有めへし否を助平だア北、夫ア宜が此内の横も壁も万邊さく大
 きいじやアねへか西洋諸國名ある所の都府の何れも美麗の家作りよて樓閣高く聳え煉瓦石築三
 層五層六層又至り其廣きとも限りさく實目驚かすあり是西洋各國とて盡く富る者のみある
 ん非ず貧富とも其差ひあれども大都繁花の地への貧人の居を搦と許さるるは依て富豪なる人
 のより合て居室を建て連ねたるよりて一体は高い高樓のみなり又或は大廈を建るより足ざる
 者の五人も十人も二十人も三十人も寄り集まりて一軒の家を建て其内を仕切りて酒屋をさす者
 あり醬油見世を開く者あり器械を賣る者あり斬髪處あり浴湯あり因て大体のどの一家の内よて
 事たり雨の日雪の夜も遠き處まで往かよひして賣買するの勞なし彌、北公此で眺望て居るよ
 やア如何ぞ拙梅だか向ふの二階の方へ回りて往て見様じやアねへか北、夫ア宜がぶらくして
 人の部屋杯ぞを覗いたら剣突でも喰アめめへの彌、面白くも無幾程覗いて歩行たつても万引で
 もじやアしめへし白眞劔を構ア事が有者か夫より兩人よて廊下を環り漸く歩行乍ら北、隨分
 異人も無持じやア無か此様は樓や何かを通る處へ拋出してチヤく中よやア田舎へでも持て行
 く阿蘭陀徳利だとか何ぞと云て一本二百位のツよやア賣奴があるぞ彌、止ねへな變は紛か

し込で中は残つてでも有かと思つて如何せ空處だ振て見たつても行きやアねへ北、手前社止ね
 へな匂ひ嗅て見たりして彌、是やア密柑酒の徳利だとコツナのワンの匂ひがするぞ北、止と
 云のよマナ油断も透も成事ちやアねへ手前兩方の袂へ色の決たのを二本引指込アがつて彌、眞
 坊めへ人間が悪やア何ちが重いか目方を引て見たんだ北、不見識な事を爲さんかト又もや段
 く先へ進み行き北、オット此が階子の段だ二階へ上らうじやアねへか榮螺の轍を見た様よぐ
 るく螺旅て上るおんぞア味へじやア無か斯うし無ツちやア席許り塞げて方が付ねへ彌、愈
 く二階へ來たが響う三階へ上つて廻らうじやアねへかト又もや三階をぶらくし乍ら北「ヤ
 ア是やア索的だ日本唐天竺一白眼中く芝の愛宕や横濱の野毛山とい大違ひ天道様の脊中が見
 へるぞ彌、ドレく是やア奇手烈く向のふ方へ烟が歩行て行の何だらう北、彼マア今此か
 ら出た蒸氣車よ彌、夫よしちやア余より早いぢやアねへか北、夫ア前横濱や神戸の蒸氣たア
 違つて本店じやアねへか石炭を焚くよも調合が別だア弥、彼ア家根の上處じやアねへ地の底
 でも水の底でも鉄道が有とさ彌、西洋よも七夕様が有のかのう北、何故く彌、アレ見ねへか
 赤いのや白いのや色く短冊じやアねへ大きな色紙とかいふ謎團扇ア見た様赤物が方への
 屋根の上へ押立つて有じやアねへか北、馬鹿を云ねへ彼やアフラホだア（フラホとい家くよ
 て目印とする旗章あり夫より廻りて真中の處へ來りて見れば手水りの外水遣ひする場所あり）
 北、テイく彼鉄の火鉢を見た様赤物よ水が充分張て有がマア何だらう彌、成程井戸流しを見

た機を處たが分らねへのうといふ處へ同じく之も相容と覺しき異人等の處へ入り來り彼の水の
 入れたる器へ立寄り口の轉旋を廻し水を出して手を洗ひ口を漱ぎ又轉旋をかへして水を留め其
 處を出で、去りけり兩人の顔見合せ 北「漸々分つた遣ひ水だ夫よしても大勢で遣ふのよアッナ
 入物一つの水で足る事ちやア無如何するんだらう 彌「下から汲で來て取替へるんだらうよ北」
 一馬鹿ア謂ねへ下から此迄持運んで居ちやア大變だ此高い處へ如何成者か 彌「オ、向ふの處よボ
 ンアが有じやアねへかドレ」ト兩人よて立掛押で見れば下の方より水の上り來るゆゑ 北「宜
 鹽梅よしやアがるじやア無かト余念無水を揚て居たりしが 彌「今異人が出した様よしして汲て有
 水を走らして見様じやアねへか 北「己ら馴れねへから手前チヨイと遣て見ねいな 彌「利口の無
 奴じやアねへかト云乍ら水溜の小口へ手を當てければ如何したりけん小口寛みて水走り出るゆ
 ゑ面白きと思ひ暫らく中内は段々水出て其邊一面は水溜りければ初めて心づき 彌「ヤア斯
 う何時迄も水を出して居ちやア際限がねへ留め様じやア無かト色くすれども螺旋の仕方を
 知らざるゆゑ益々水走り出るよぞ兩人の持合し 北「大變だ留ら無く如何したら宜らう 彌「
 夫故知らねへ事の手を附ちやア成ねへと云のよ生意氣な事を仕やアかるから 北「夫でも手前や
 ンで見ろと云たじやアねへか 彌「馴れ無りやア馴無とさせ手前謂ねへんだ知ッてる様な口を聞や
 ンがつて 北「全体手前が爲と謂したから遣かけたんだと兩人よて争ひ乍ら途方は暮ぐる
 廻つて居る内は水の勢ひ盛んとなり夥しく流れ渡るゆゑ諸ともよ呆きれのて詮方なき故 彌「手

前其口の處へ手を當て押へて在へる 北「真坊め何時迄斯して居られる者か 彌「宜の巴が替る
 からどツかへ行て小口へ當て置様な物を見つけて來
 ねへなと云ければ北八の途方は暮たる折ある故幸ひ
 なりと思ひ其處をかけ出し巴が部屋へ來り眞寺よな
 つて坐敷の隅よ知ぬ顔して居たり彌次郎の今よ北八
 が來らんと外面の方を覗き乍ら待どもく歸ればこ
 う一生懸命よ小口を押へまご／＼して居る處へ余所
 の異人出來り此休を見て何事やらんと不審の体なり
 彌次郎の筒様／＼と云ひけれども言葉通じ兼る故涙
 乍らよ手まねして頼みければ異人の笑ひ乍ら口の螺
 旋をしてやりければ水の其儘留りけり夫より部屋へ
 歸りて北八と顔を見合せ 彌「何をして居るんだ氣樂
 じやアねへか 北「彼柄塞子を探して見たが些ども宜
 物も無から今工夫して居る處だ 彌「貴公の如何した
 へ 北「アノ位な件よ困る様な智慧の無んじやアねへ
 が手前が算段を如何するか試して見たんだ 彌「甘く云せ如何して手前よ彼防きが附く物か 北八



水溜の水のこぼらぬ向ふ見事出過ぎの多く過りの種

彌次郎もおなじく

はしり出て留らぬ水板の間は流れてひやす胸の内かな

彌次郎が先き二階から見た蒸氣の余程日本との違ふ様だのう北「夫は屋根の上を這る處を見ちやア實に驚く仕掛じやあねへか彌「如何だへ洋服の出来て居るし博覽會へ出掛る前は蒸氣でも乗つて龍顧見物の瀬踏さんさア如何だらう北「此奴の面白い兩人で抜掛と仕掛かのう彌「夫もしても瓦斯燈や何かで夜の方が町の景色が奇麗だといふ柄晩方から徐く素見相じやア無かと相談極り馳て日の暮るを待て在りける兎角する中黄昏の頃となりランプの掃除をして油をさし燈の用意とありければ北「サアぶら〜乗出しと仕掛じやアねへか彌「手前も已らも今日の洋服だぜと兩人はて密と抜出てうこらこら見歩行うち蒸氣の出る場所へ丁度行き當りしゆへ北「サア爰だ乗うじやアねへかと云乍らステーションと覺しき所へ來たり車も乗り度由を云けれとも言葉の通せぬゆへ北「オ、彌次や何程口で云たても分る事じやアねへ傳り貨幣を出して遣らうぢやア無か然すりやア行處だけの分を取て釣を返すだらう彌「ム、夫が宜何程許り出らうのう北「些と斗り出すのも日本人の懐中が見へるから如何せ釣を取んだ大きい札を叩き付構じやア無か大きいも小せいも目ア十錢が二枚しきつちやア有やアし無手前

立替て措て臭ねへ跡で勘定しよ彌「大方然事だらうと思つた手前が有との減多ふありやアしねへ一昨日の二分の如何したへ北「彼やシヤボシを買たり香水を買たり鼻紙を買たり彌「氣狂ひじみた野郎じやア無か不常手身斗りかんで居やアがる癖もアア已の持て居るのを出して置り北「手前幾位握つて在んだ彌「二圓の札が一枚有ア是を遣ちまアと跡の一文をしよ成から取替て小さいのを一圓許り遣うじやアねへか北「少氣事を云ねへ胡人は心底ア見られらア皆あ出ねへ然すりやア釣を出すから同じ事た其處ア西洋じやア紀帳面だ厘毛でも違やアしねへ彌「夫ならうり仕様ト二圓の札を差出し蒸氣も乗りたしといふ手真似をしたり元來この處より乗り合の賃銀の上等中等を別として下等の振り合ひ一人前途中の下り處より一分と二分と三分と一圓と四ヶ所の差別あり兩人の方ではどこ迄といふ目當さきゆゑ二圓さし出せしが定めて下り所の一ヶ所よて賃銀も一樣に定めある事と思ふ處は異人の方よて一人前一圓の場所まで行となりと思ひしゆゑ二圓の金を受取其所迄の切手一枚わたして釣錢の沙汰なし兩人の者の案も相違し互目と目をきよろ〜北「如何したんだらう釣の無様だぜ彌「今も持て來んだらうと待うちよ最早發車の合圖よて鈴の音聞へけれバ一同先を争ひて乗り込むよぞ兩人も詮方なく車の中へ道入ながら北「愈〜取を揚げ大明神よ違ひぬぜへ彌「夫もしちやア強儀も高しじやアねへか北「高へか安いか知らねへか何處迄行んだらう彌「然よ何處迄行て揚るんだか分らぬ〜余まり彌子が悪いじやアねへか北「夫だから皆出すめいと思つたんだ人の懐中だと思

つて氣前の宜様事事を謂アがるから手前杯ぞと一所へ何でも出来やアしねへ 彌然いの中最う
 余程来たが爰の何といふ町だらう 北「飽坊め己らだつても案内でも来やしめへし分るもんか
 彼是する間も初めの下場へ来りし故夫々くは車より下る様子あり彌次北の兩人の此所へ下る切
 手ならざるゆゑ残り置れ又くは車の合圖の鈴の音と共に先をさして出る体なり彌「是ア未爰で
 下るんじやア無のかのう 北「然して見りやア横濱の様も鹽梅は鶴見川崎品川とかいふ調子も幾
 處もステーションが有と見える此次もやア下りるんだらうト段々す、み行く時又もやス
 ナーションと見える處まで夫々下りるものあり乗る者あり然ども兩人への下りよとも云いさ
 る故彌「オイ、斯して黙つて居ちや何處で下ろすんだか分りやア任無切手を出して見様じや
 アねへか 北「ム、然仕様ト切手の札を出して下りんとしたりし掛の異人其所へ来りて切手の
 文字を見て「ザット、イス、ノット、マス、フリース、イツト、イス、モール、デステンス、(是の爰で
 のあし最と先よて下りる場所ありといふ事なり)彌「何だか分ら無が爰で下りるんじやア無と云
 景色だせ 北「仕方がねへ行く丈け行て見様何處迄行たつても龍動の町を離れやしめへ間違つた
 處が歐羅巴の中だ兎角する間も愈々留りの下り場も若せしゆる客の残らず車より出るゆゑ兩
 人も切手を出しければ滞りなく受取りて欄の外へと出しけり 北「愈々下しやアがつた爰だ
 く併し道法の何程位の来たんだらう 彌「然よ日本の蒸氣の割合よしても餘程来て居よ違ひね
 へ北「最う何時だらう 彌「何だか瓦斯燈の光やア晝間のやうよ明るいから未宵の間の心持だが

人の通りは無薄つ氣味が悪いじやアねへか 北「何處が何處だか些とも分ら無無暗も歩行いたつ
 て方が付ねへ道を開て早く歸らうじやアねへか 彌「どうせ聞たつても言詞が分りやアしねへ車
 の来た様を鹽梅は轍道の在處を尋ねて行うじやアねへか 彌「馬鹿ア云ねへさ西洋の鉄道の一本
 許りじやアねへ横も豎も基盤の目の様も幾位も有るから分りやアしねへ 彌「又車も乗て歸
 へつた處が錢のあし已ア腹が減て来た何か食きてへが仕方が無のう 北「已も先きから下腹が空
 くして居らアトまごくする内も段々夜更て来るしうこ氣味悪くなりければ今更宿元を
 出し抜けし出し事を後悔して 彌「通さんでも居りやア此様半間も成やア仕ねへ二人で出たのが
 誤りだのう 北「其様愚痴を謂たつても如何なる者かと口よ云と詮方なく徐ろよ悲しく成て今
 の早精も張りもぬけ果とぼくして居るところへ 彌「二人出て来り「ホワイ、アール、コウ、オ
 ルキング、セイル、エト、サーチ、レイト、ダイ、(お前達の何ゆへ夜更よこ、よ在やといふ事也)彌「
 こりア 彌「何を云んだか陳分漢だか定めし己らが今頃爰居のを不思議と思つて聞くんた
 らう丁度宜道を開てへが矢張りバア、で相手が悪いト云てぬる 彌「此方よても言葉通せず如
 何ども爲き様なきゆる彌次郎等の蒸氣より下りたる處の方を指さして彼處く云けるゆゑ 彌「
 查の其云ま、よ連れ行しよ車の出る場所へ来りし故はじめて蒸氣も乗りて兩人の来りし件を悟
 り此兩人の何れの處より乗せ来りしやと蒸氣掛りの者へ問ひけるよ元乗り込し場所切手よて分
 りし故 彌「送より送りて宿元へかへす事どのなりぬ彌次郎の口吟て

北八も又

抜け掛けの宿屋を出て歸るべき道まじつに町の深入り
おもひきやびやかしよ乗る蒸氣車よ財布の底をはたくべしと
兎角する間も暗くとも終る其夜も明きけり

第十五編

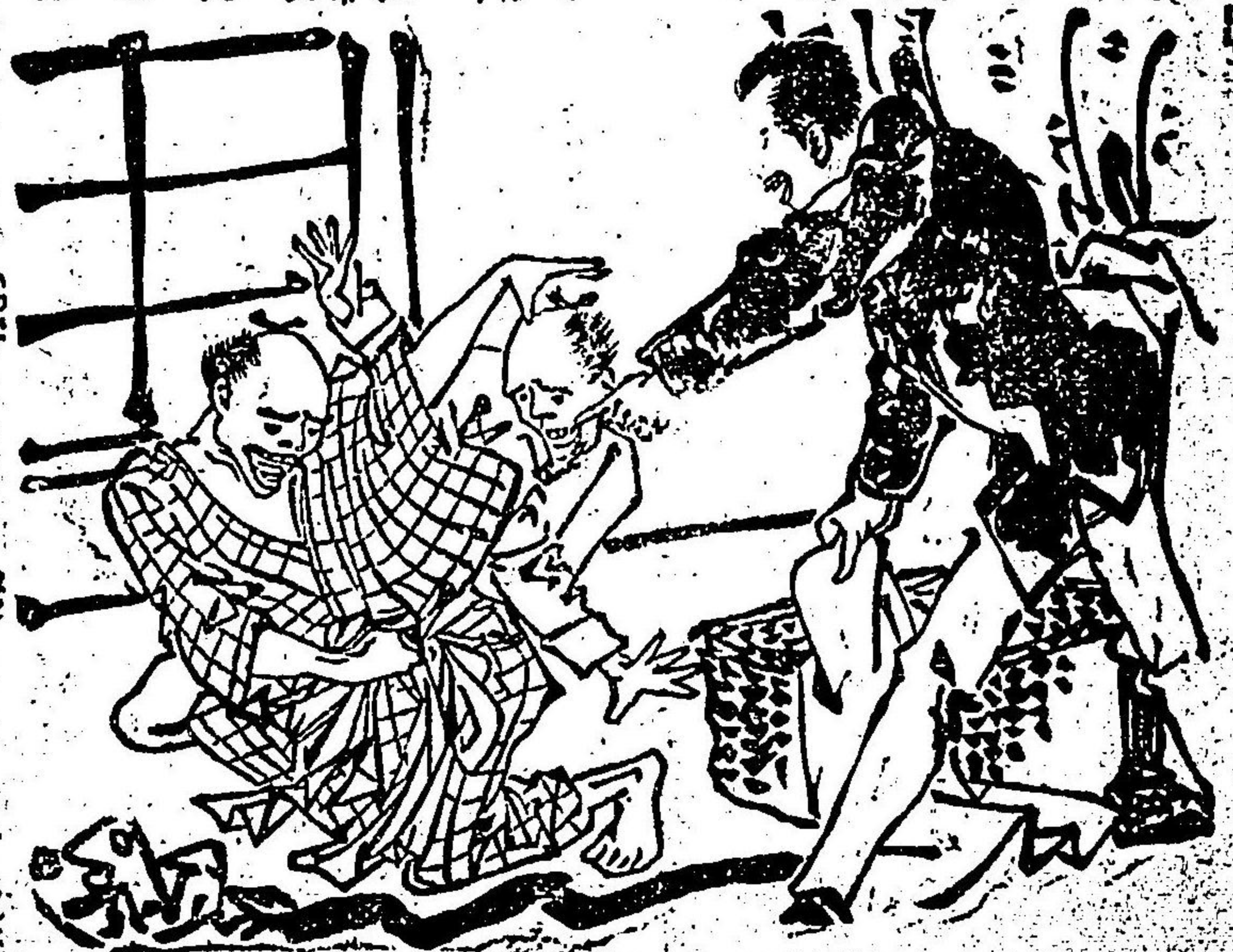
旅の境界ハ一夜毎ヨ其宿リを替今日ノ百
里ノ遠キヨあり翌日ノ千里ノ外ヨあり市ヲ行テ鳥ノ聲ヲ聞き川ヲ過テ水ノ流ルヲ見其見ルモ
の聞ク物ヲつけて種々ノ感ヲ興シ無量ノ思ヒヲ發ス云々も一所不住なる故ヨ耳目未タ新
しニ聊カも執念執着ノ心ナク夢ノ如クヨ月日ヲ過ル物ナリ買囑ノ詩ヨ客舎并州三十霜歸心日夜
風陽ヲ憶ム無端更ニ桑乾ノ水ヲ渡リテ却ツテ并州ヲ望メハ是故郷ヲ賦セリ是れ三十余年光陰ヲ
旅ヨ居テ送ル間ノ千里ノ空ヲ打詠め早く歸ケテ故郷ノ人ヨ逢ント一日も忘ル事ノ無リシを斷
くノ事也テ故郷ヘ歸ル道ヲ行ラシテ并州ノ方ヲ見渡セバ旅ノ宿リト云々から十年ノ久シキヲ經
テる處なる故又名種々ノ概ナシテ故郷ヲ出シ心地ナリト云々を以テ見れば只管旅ノ憂キも
の云々云々周易ノ三三山上ノ火あるノ旅此歸釋も長れと是の書く東國の例の日本連中の一問
の内よ取くノ氣樂咄しよ現をぬかし日の老ををぬへぬ中よ世ナクノ彌次今日ノ天氣も
好から博覽會へ出掛け構じやアねへを彌ナニ然き急ぐ事かね余より狼狽とつて博覽會

の門口で戸感ひでも爲と極りが悪い一ツ杯飲んでツ柄でも好やア此「失事」をして居ちやア又
今日も慣れらア其様は飲みたきカツ瓢箪へでも入れて出掛て道々冷で遣かすと爲様じやアね
へか「彌」鐘坊めイ向島か上野へでも行きやアしめいし西洋じやア歩行乍ら食ッたり立小便なん
ぞア余より下さらねへとよ此「夫」夫から隨意よしやアがれ已ア五六年痲瘋をすける柄マア緩くりし
ぬ「彌」生意氣をいふ者へ博覽會へくつて面白もぬへ博覽會を見た様は世界中の敵道具物を見
たッて如何なる者か博覽會の看板で食ふのが身上だ此「身上」でも山椒でも勝手な味附を指さや
アがれ一々人よ反を打ちやアがる日本の數道しじやアねへか手前を見た様を奴を兄弟だの朋友
だのと他日逢云つたのが腹が立て成程期かぬへ筆ちやア無へお袋が生てる時然云ツた他人別れ
ア難わかれ味の物でも喰ときが親類たとしく泣眞をし乍ら腹を立ければ「彌」コノ頑痴氣め
の博覽會の悪い泣出しアがつて今日未飲やアしめへし御茶の上の悪い地路じやア無かと争論
よ及びけれバ「彌」ナイノ宜加減よしねへ寄ると歸ると無益へ事を云ひ合じやアねへか己ッ
ちや此な扱かひの迷惑だ通公も前預けるせト廣藏ハ別の一問よ立けれバ「通」お前達も困るじ
やアねへか通さん案じさん今日如何でも伊進發よ違ひねへよ最う爰よ成ちや己夫よ急
がずとも宜マア一寸と一ツ杯遣ねへ己等も些許り書かけた事が有から此「通」さん又極りで陳文
漢などを書んだらう止ねへ通「夫」さんじやアねへ今書掛た物の松林亭伯圓先生から聞た「伯圓
先生の當時三府第一の講義師なり」博覽會の因縁を文章よ書て今度の道中記を纏める序文よ杜

機と思ふんだ彌「夫やア面白い已等も些と聞して呉ねへな通」お前達の如何せ聞て居やアし
 ねへマア置うよ彌「お前意地が悪いぜ聞かして呉れといへば勿体をつけて通」勿体をつけるんじ
 やアねへが胡魔化すからよ北「何と謹んで拜聴奉る抑々博覽會の發端と云い通」其通て人を
 馬鹿又爲じやアねへか彌「北八手前へ何でも口を出しやアがつて黙止て聞きやアなマア通さん
 已等も言ッて呉ねへな第一博覽會と云の如何いふ事だらう通」儘よやア知れねへが已等が聞
 たよやア博覽會といふの廣く色く物を見る事で會といふの樣く亦代物を集めて置
 だらうだ彌「色く物を澤山と集めて見りやア如何いふ機能が有んだへ彌」夫も先生が云ふ
 よやア木でも草でも金でも石でも色く拵らひ様鍛ひ様で器械よ仕様が何よ仕様が損徳も在し
 便利も有ふから物事よ附て工夫を用ひて事をするんだとよ其工夫と用ひるよも其代物を見た事
 が無ッちやア手の出し様が無から世界よ有ん限りの物を見覺へて夫から考ひを附る爲だとよ彌
 「夫ア今時許りて昔其様叫し無じやアねへか通」昔だつても支那よやア張華が博物志待た
 最う一倍古の處じやア本神綱目示雅杯ぞといふ物の名を集めて講釋を附た物が有とよ北「朝花
 が三國志の兩國の講釋場で立讀を聞て本藏が子を以て力彌の處へ叩き附たの九段目の芝居で
 見たし自我借の堀の内の御師様へお参りの道中や彦宗旨の堅まり法華で聞飽て居其様者が博
 覽會の掛り合ひじやア有めへ通」貴様よやア何を云たつても冗事だが支那許りじやアねへ日
 本での三才圖繪だの和名抄だの西洋での博物新編だのと云本が有やア夫も是亦物事を廣く覽え

る爲の品だどよ彌「通さん例の名歌を附會たどさし出す
 品物を博く集めた博覽とつまらぬといふ狭い丁
 簡」

北八も又一首認ためて
 萬國のがらくた物を取りひろげ博覽會の古道具店
 北「夫じやア寛く出掛る支度を任様じやアねへか
 彌」手前口で許り出掛るの仕度だのと謂して押居ッ
 ておちやア仕様が無じやアねへか北「拙子最う夕べ
 からすぼんを着てシャツゴを抱て寐ておるんだ是で
 マンタルを引掛りやア直よ宜んだオイ」通さん今
 度のお前が添なよ落ついておちやア困るぜ方の附ね
 へ連中だ体操場の板へ乗た様よ片足持上りやア片方
 が下るし少間癩成じやア無か旦那も旦那だ今日あん
 ざア飲すよ出掛たつても宜じやアねへか又三味線の
 音がすらア滅多な事ちア有アしめへ彌次公人よ持ア
 事アねへ二人で先へ行うじやアねへか彌「ア待ねへと云事よ何時も二人で始まつちやア鈍聞



事アねへ二人で先へ行うじやアねへか彌「ア待ねへと云事よ何時も二人で始まつちやア鈍聞

を働くじやアねへか北馬鹿を謂ねへ離だつても不調法する事が有ア日外講釋場で聞た孔子様
 テイ小人(小人)とい聖人の心得よていふあるべし)でも我五十よして易を讀んで大過無るべしと
 か若い時の幾位もかな進ひな半間を働いたよ進ひねへ彌氣樂な事を云ひねへ孔子様と私ら
 達と一所よ成者か夫やア宜がマア仕度を仕やうと云乍ら二人よて彼是する處へ通次郎出来たり
 通ち前達の最う仕度するの二人ばかり出掛る丁
 有めへマア待ねへな北成無よ夫
 な事を云て押し返して居る中よやア日が暮らア拙子ア先へ行く算段をして置くよ洋服を取揃ひ
 乍ら何ゆゑもや胸くりしたる体よて北マア大變だ襟巻が無何處へ遣たんだらうと其邊此邊を
 探せども有ざる故不思議じやア無か夕べちやんと皆んな揃へて置たんだ此坐敷の中で見へ無
 る等いねへ彌次さんち前知ッてぬんだらう彌常談云ッちやア成ねへ何で拙子が知もんか手前
 の襟巻と云さア如何様だどうせ碌を物じやア有めへ多分フランチルの細く堅まつて烟管筒を見
 た様よ成た色のさめた小襦無んだらう北無益ねへ事を云ねへな此方へ來ると直よ買ッた白い
 縮緬吳服のこりくする奴で長さが八尺有んだ手前如何かして私らよ氣を揉せるんだらう通
 風の悪い事を云ねへ其襟巻を誰か知る者か何處へ置所を忘れやがッちやア何時でも夫な事を
 云せ能マア扱して見ねへさ北見んだよ幾等か探したッても有やしアねへ彌愛よある此風
 占敷の下よ見えるの何だへ彼じやア無か北是やア通さんの懐裏に此様黒いんじや無通
 ん笑ッて居てお前知ッて居るんだらう拙子が急ぐ者だ柄申儀ア成ねへ通否か事を云男じやア

無か何で己ら其襟巻を知者か何處よ道入ッて居んだらう否な掛り合だぜ北夫じやア如何
 したんだらう先刻愛のまどろすか此前を通たが這奴じやア無か狂散臭い目ッ附きの野郎だと思
 つた如何でも知無りやア爰の内へ掛合て詮議と仕無ッちやア成ねへ彌違ひねへ此様件を打捨
 ヲて置ちやア日本の耻よならア二人とも眞赤よありて腹を立けれ通兩人乍らマア夫よ
 暑く成て騒く仲いねへ落付ねへな若此方よでも有と申譯いねへ七度探して人を疑ぐれ能考へて
 見ねへさといひ乍ら北八が帯へ目をつけて北お前腰よめて居のは何だへと云れたるゆゑ始め
 て必づき北是だく漸と安心した今朝帯が見へ一河一寸と間よ合せよぐるく巻て居たんだ
 通夫見なせい其通りだ一寸と巻て居もねへ者だ人よ散ッて氣を揉せやがつて脊負た子を三年
 尋ねるとい手前の事だ一下りが事をするも大概が有ぜ北ナニ巴ア其様事又騒ぎやア仕無此様
 物を無したつても張手前が騒が無のよ誰か岡獅子を舞ふ奴が有者か青く成たり赤く成たり學
 校の色圖よもねへ顔色を爲がつて余まじ可笑んで一句うかんだ
 青くなり赤くなりつ、尋ねり腰よんたる白き襟巻
 北八も又筆をとる
 襟巻を腰巻よして打忘れ盗まれたりといばる巻舌
 夫より一同博覽會へ出掛んと仕度を成て居たりけり
 英國の博物館の世界の万有を貯蓄して歐洲第一の富を成り蔵書三十六萬余其他堂宇の古器物彫

像動物植物等各所より別ち億萬の物品を網羅す就中希世の珍寶と集めたるの古物の部よりして世界の人造物を集め器械學製造學に關する物品陶器鉄器等莫大の奇觀として之を概覽せんとする時の朝より暮に至ると雖も尙其半だも見得る事能はば是の英吉利一國の物なり況や萬國の珍を集めたる事ある故其大略を見ると雖も五日十日にして盡く及ふべからず館の中は食店あり茶舗あり寫眞場あり又音樂を張りて種々の妙曲を奏し遊樂を盡すの所あり館内極めて廣きが故に數多の游人雲集すると雖も更に雜沓するに至らず又水晶宮と稱する博物館あり龍動府より南の方凡三里半の地は在長サ二百七十間高サ三十三間二尺にして其建築全体柱梁等みち鉄を以て造り玻璃を以て外面を張り詰めたる故之を遠く望み見れば恰も水晶を以て造りたるに似たり此中より宇内の万物を蓄ひたり有名なる石像彫刻の如きもの都て摸樣よまて各國著名の寺觀宮殿閣等の如きを周覽する時の眞は世界萬國を行き回ると異ならず又許多の佳木芳草繁植したる其間より地水を繞らし更は器械を設けて水を噴出せしむ其樹木の如きもの冬月と雖も青々として色を變ず正は一望の中より四時を備ひ幾んど仙境を覺ゆ此水晶宮の周回より三層より造り一層毎に蒐集の物品を分ち或は古器貨幣或は兵器軍艦砲臺等盡く之を摸造し或は妙工の油繪を描く又二層より家具絹布及び諸々の小品を販賣する肆店あり是を徘徊する時の又宛も市街を行くは異ならず其廣大無量なるに能く筆紙の及ぶ所もあらず文明の文明たる所以開化の開化たる所以此博覽會を以て始めて知るべし日本連中の新博覽會の場へ來り小口より順

く見えて回る所は開し勝る盛大の作業より自を驚かし魂を飛して酒を酔るが如くして何と云ふべき言葉とへ有べき者も有間敷物も備はる万國の自慢の是ぞと知られたり北「オイ」通さん素の物じやアねへか何から見て宜か分りやアしねへ此向ふは有蒸氣の器械さんぞア誰の細工だか知らねへが仕事細つかぢやア無か何から初めて何處で仕舞つたんだか已ア昔し大工の弟子も成て墨金を引た事も有が分らねへ彌「手前が大工で思ひ出したが親方の使ひも出て買物の錢を遣ひ込んで印半天の着逃げをして炭團屋の黒か所は居候をして居る時ア已らよ厄介を掛やアがつたぜ北「夫ア相子だ手前が湯草の湯屋の三助を働いて居る時虚ッ財布で人カよ乗りやアがつて抜裏で車を逃すと爲のを巡査さんよ捕つて屯所へ留られて已らよ來しやアがつた時の苦しい錢を無理取アがつたぜ通「下らねへ事を云ひ無で彼處の角もある耕作と機械の器械を見せへ彼やア亞米利加から擔ぎ出したんだが能出來て居じやアねへか北「通さん其様よ褒さん外外の事い免も角も日本の米國だから百姓の道具杯どじやア引を取んじやア無已らが親父の在所の下總で山のねへ日本一の平地の開山だからマア第一米が大專て麥稗粟豆茄子烟草法蓮草よ眞桑瓜菜種よ牛房人參大根唐茄子よ里芋葱韭よんよく生姜通「宜加減よ仕ねへお其様物が出來たつても器械の事の開けぬへ北「器械の第一犁鋤万能鋤鋤藤唐鋤手摺白米臼麥搗臼肥桶の皆金織だ通「馬鹿を謂さ無でアノ油繪を見や彼やア歐羅巴各國で別段よ珍重する物だ人物の活てる様だらう景色を見や山さんぞア遠い峰も近い船も生のま、だぜこつちの軍の燒討の場

所あんざア驚くじやアねへか空へ火の移つた色合ひあんざア如何したら彼様も出来るだらうと思ふぜ彌何の人を始める時の寫眞の繪を大きく爲樹で筆先が細つけい柄奇麗だと思つたが能見ると皆死で居ア一体西洋の繪よア風流な濼い處が有やア仕ねへ彼よりやア繪入新聞の筋彫の繪の方が余程氣が利て居あ通此所の方よある金銀の貨幣の羅馬と希臘から出したのが澤山在んだが色くを恰好ものが在じやアねへか彌ヤア彼方の方よ有の日本通通用金だぜ彼を見ちやア西洋の奴らア價金と拵ひやがる道理で横濱邊りて錢遣へが荒へと思つた通馬鹿を云ふへ彼やア是亦日本の金銀だが政府から送つて寄したんだ夫だから博覽會の萬國の物が有と云んだ彌ヤア彼を見や物さしや量や升杯が有ぜ無益物を出すじやア無か此先の方へ廻ると磨鉢や磨木杯ぞを並べて胡魔化じやアがるぜ通蕪坊めへ七種か裏店者の引越しやア有めへしアノ高い所よ有物の佛蘭西から出した着物や玩物だが巴黎斯の流石寶澤を都だけて大造ち物じやア無か大体の金銀寶石珊瑚珠で拵へたんだぜ北其内は珊瑚珠の伊太利の産物だ相たが丸太島じやサ喰ひ込んだのう彌「バア」くも彼な胡魔化しを爲から油断が成ねへ其様事を考へると爰も廣げて在代物も是亦詐しやア無か色が悪く赤いじやアねへか通無益へ事を云ひねへな相對どの違ハア博覽會よやア鑑定人と云奴が在ア其様無益へ事で誰が承知する者か夫が駄目と云いねへでアノ大きな孔雀石を見や彼も是亦伊太利から出したんだ相たか不思議じや無ねへか北何か不思議だへアノ位な物の何でもねへ橋本喜三郎の生人形杯ぞよ此へて見り

やア河童の尻た夫よ近頃の細工が漸く開けて向回院の開帳や淺草の奥山よ出てゐる眞傳の細工麥藁細工具細工竹細工瀬戸物細工日本の人程器用あ着の無いだらうと思ふぜ通手前アレを何だと思つて居る拵た物じやア無ぜ自然と地から涌出したんだぜ天造物と云いアノ事だ夫許りじやねへ此方の方の人身解剖を見や彼ア紙細工だけれども能出來て居るじや無か本との人間の様だぜ手足から頭の鹽梅臍の色迄本との些とも替らねへてんだ彌「彼を五臟圓の看板を見た様お物の面白ねへ何れ熊の膏藥やあか切の藥を賣る山師物だらう通貴様よやア困るぜ何よも知もしねへ癖よ何かへけちを付て彼で西洋じやアお醫者様が人間の身体の事を稽古爲んだ北彼様小兒欺しを物を拵へたつても何よ成者か直らねへ病氣の直りやアしねへ己らが町内見世開きをした木板風庵さんを見ねへ何でも藥の西洋の水藥で無つちやア成ねへと云から本よ然かと思つて居たら風邪を引たのを直す事さへ出來やアしねへ通



橋本喜三郎の生人形杯ぞよ此へて見り

「彼アも前下谷の病院で十日許りしッきやア習つたんじやア無か彼様者を當よして西洋の醫者の悪口を謂ちやア有難く無だらう湯島の順天堂の先生杯ぞを見や脹満の脹れたのハ腹へ管を挿て水を出したり腹を割て瘻の虫を摘み出して其跡を直し縫て措と三日立ねへ内は直るんザア實は咄しよも聞無へ療治じやアねへか北「病氣の講釋の止て呉ねへ病ひと來やア頭痛が爲のもぞつと爲ア痔で三年林病で五年揚梅瘡で七年便毒で六年苦しんで居るから醫者の咄しを聞でも吐逆が出らア余まり面倒くさい雜々した物を澤山見たら何だが苦澁くして厭な心持も成た未余程有のかのう通「未々漸と半分も成やアしねへ是柄が買物有んだ北「河開きの花火を見た様は是からか〜よやア閉口ゼマア宜加減よして出様じやアねへか通「折角爰迄見よ來て見納めねへ奴が有者か其様は飽たら此外部も出て見ねへ其内は且那や何かの中を見て在から北「外部と何だへ如何せ碌な處じやア有めへ通「外部と云ふはア外の方の事だ外の方の徜徉ひて遊ぶ處だから世界はあり丈の草や木の植物が有ぜ如何なる陽氣だか知れやしねへ彌「夫ア面白い早く教へて呉れりやア宜のよ北公手前と二人で徜徉うト云乍ら外側の方より來り見れば我國よて見得る處ろの梅桃櫻の類を始めとして一切名の知れざる草木を數千本植立て花あり實あり枝葉おひ茂りて人の目を喜こべし又うの間は種々の禽獸を育ひおき異禽奇獸の聲喧しければ彌「是やア強氣な晴々として宜處だ博覽會だぞ云なア此様植木もんザア有んじやア有めへと思つた通「夫だから博覽會だぞ世界は有物が爰は無いと云ふ事の有やアしねへ北「此先へ行

きやア夫婦喧嘩でも馬鹿雜子でも角力甚句でも何でも有ぜ彌「此様植木の何の爲よ見せるんだらう通「何だつても理屈のねへ事ハ有やアしねへ斯して植て置きやア此木の如何すれば早く延びる此花を咲せるよやア此様こと此州を茂らせるよやア斯うといふ考ひを附る爲だよ北「然聞きやア慢更分らねへ筋でもねへ夫は附て一首喋々て見て呉んねへ
 むかし〜枯木よ花の夫ならで金のなる木の爰やあるらん
 北「此分らねへ樹の枝を折べしよつて日本へ土産も持て行けやア無へか通「飛んでも無事を云せ夫な事を仕様者なら辭金だ北「向島の櫻じやア有めいし些どの宜だらう通「方圖もねへ徒らを仕ちやア成ねへせ長〜是で千秋樂だから目出度販る迄失錯りやア拵へねへ様よし無さやア〜且那も回つて來た是から皆あで觀殘した處を一所よ見て暗く成ねへ中歸らうじやアねへかど一同よて殘る限なく見てまひり一同大興を催ふして一同「サア〜是から宿で西洋道中の札仕舞だ大飲よ遣かうりと宿元へたちかへり大酒宴をなしたりけり「明る日より四五日の間の龍動の府中よて名高き地を遊覽なし最早殘る處も在ざる故一同の歸國の装ひをなま芝飛脚船に乗込みて出帆なし海上風波も穏かなる故初めの道との事變り故郷へ歸る祝びよ浮立心さ〜めきて目出度船の皇國なる横濱よ〜ころ着きよけれ

明治廿四年十二月十日 印刷出版

發行所 鈴木金輔

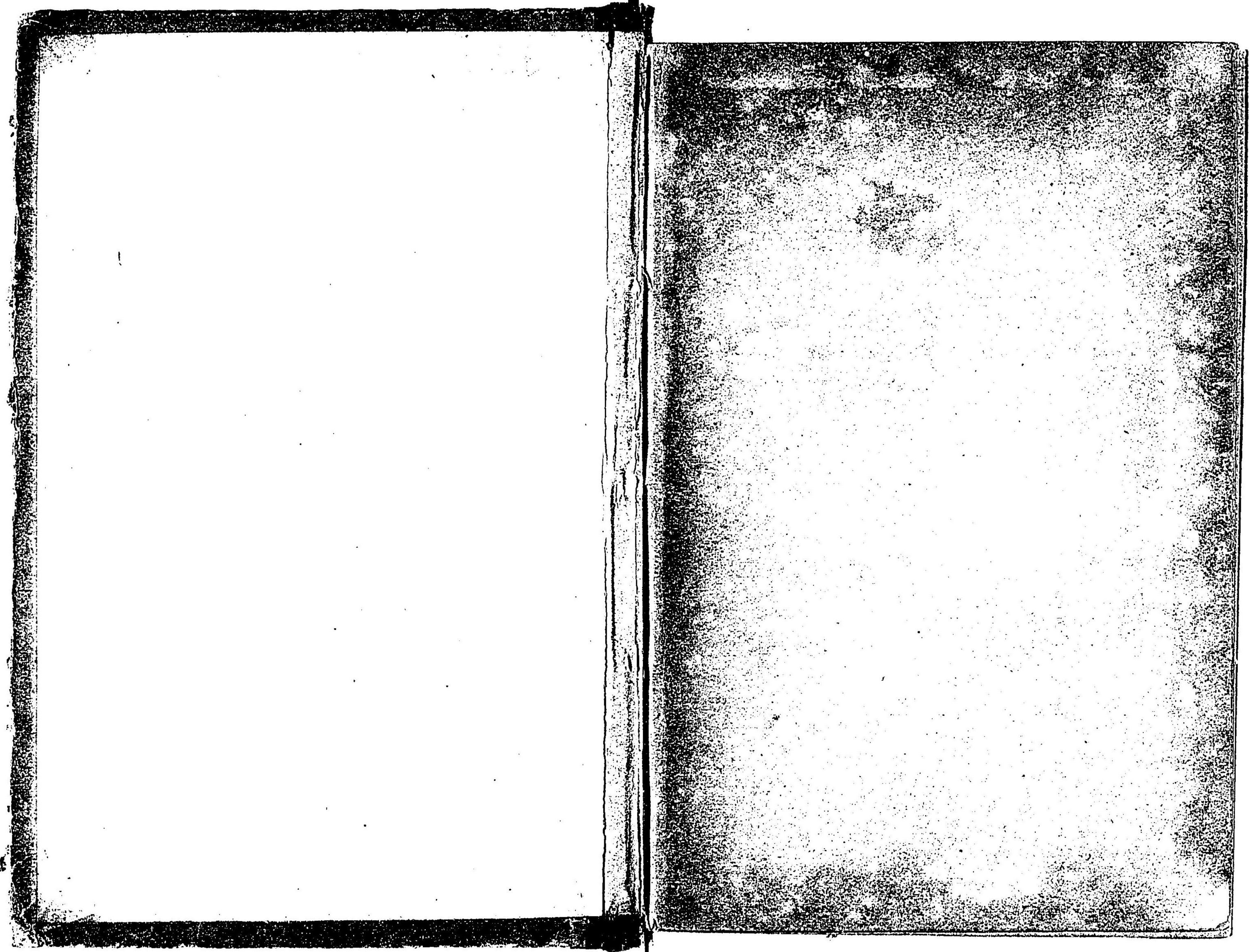
京橋區本材木町
三丁目廿六番地

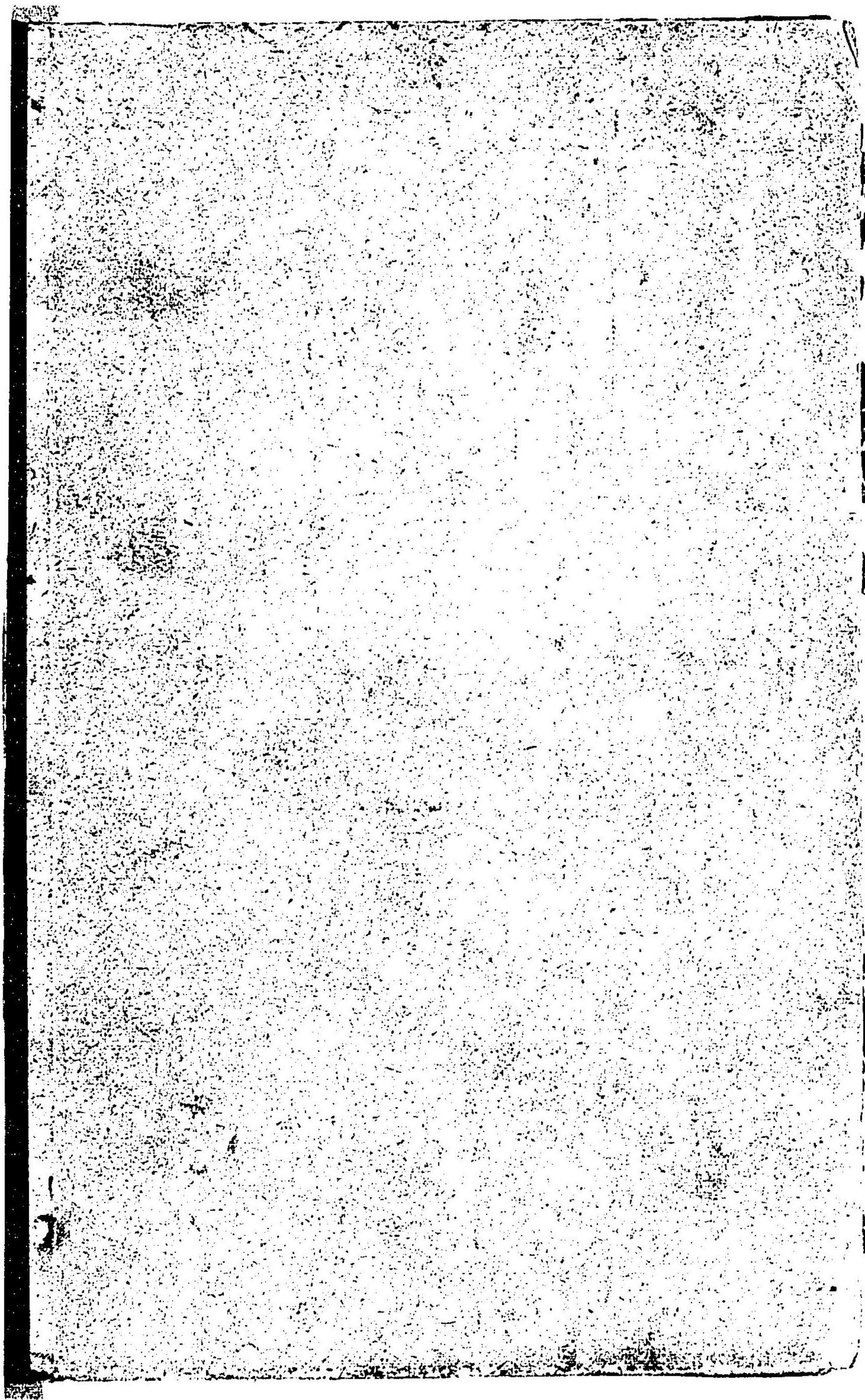
印刷者 小林由造

小石川區掃除町
三十三番地

發行所 三友會

專賣者







091659-000-3

特11-78

滑稽各国漫遊記

仮名垣 魯文/著

M24

DBO-0120

